

論評と構築とのあひだ

——ヘーゲル『イエーナ時代の論理学』研究(一)——

酒井 修

——逝世百五十周年の記念に——

一 心的聯関からの理解

——ヘーゲルがイエーナへ移つたのは、一八〇一年、一月のことである。新しい世紀の幕がいま明いて、彼は数へ年で言へば三十二歳になつてゐた。——

この前後のヘーゲルのなかには、意欲のふたつの方向がはつきり認められる。ひとつは、いはば純粹に学究的な意欲である。それは、彼自身の私的個人的生における・教養の久しき積み重ねのその内から現はれて、哲学の研究を天職とする決心に支へられつつ、いまこそ体系の構築へ一途に集中して行かうとする方向なのである。——そもそもテュービンゲンで、神学を終始積極的に研究したのも、それが古典文学および哲学の研究につながつてゐたからであり、さらに正牧師候補者(Kandidat der Theologie)の試験に合格したのち、この資格に許される職種の中から特に家庭教師の道を選んだのも、この道がさういふ研究へ引続き没頭するに必要な閑暇を保証し、また他国に遊ぶ機会を与へるからであつた。爾後七星霜余。イエーナ行きを決めたこのころのヘーゲルは、すでに、「青年時代に理想としてゐたものを、反省の形式に向けて、同時にひとつの体系にまで変更してゆく」段階に到達してゐたのであつて、この仕事は、彼自身の体系の構築の、よりいっそう順調な進捗に、發展に、いな、完成にさへならなければならないであら

う。

しかし、他方、素志を果たすべき好機に遂に廻り合つたとき、いづこの地に講筵を設けてこれまでの蓄積を公けにすべきか、はたまた更にそれへ彫琢を重ねてゆくべきか、それについてかれこれ迷ふやうな彼ではなかつた。イエーナが、最新の学藝運動の、つまり觀念論哲学および浪漫主義文学の、その黄金郷として、全ドイツに馳せてゐた名声は（実はすでに翳りが見え初めてゐたのであるけれども）、彼の眼には、他の地を顧る余地をなからしめるものと映つた。勿論、かの地で待ち受けてゐる生活が、修道院における学問僧のそのやうな、静寂の中での精進にとどまりえぬことは十分豫期される所であつたらうし、事実、彼は、イエーナに文運隆盛のさまを遙かに望んで、フランクフルト・アム・マインから直行することをためらつてさへゐる。——出来れば、バンベルクかどこか第三の町で、廉い食料品や体に良いビール、それに知人の幾人かを得、さういふ環境で英気を十分に養つてから、満を持してイエーナの地を踏みたい——そのやうに、不安と期待とが交錯する胸中を、旧友に披瀝するのも彼であつた。（この言葉はひとを和ませるであらう、そして心を開いた場合にのみ、ユーモアは語られるのである。）——にも拘らず、結局、彼はイエーナに直行する。もし熱氣や喧騒を、つまり俗累を、心底から厭うてただ純粹な学問的関心のみ生きようとしてゐたのであれば、何もその渦中へ強ひて赴くこともなかつたであらう。しかし彼が選んだのは、それとは逆に、家庭教師といふ孤独な環境を去つて毀誉褒貶が渦巻く現実の人間の生活へ立戻り、自分の思想を知的世界で公開してゆく方向であつた、そしてそのためにこそ、すでに華かな世間的成功を収めつつある旧友から推挽を期待したのである。そこには、あへて時代の子にならうとするものの客氣が、いな野心さへもがみとめられよう。

このやうに、この時分のヘーゲルのうちには、意欲のふたつの方向が、すなはち、(1) 自分の内に集中して独自の体系を構築しようとする・求心的な純学術的関心と、(2) 自分を学界言論界に拡大しようとする・時代に規定された遠心的志向とが看取され、また識別されるのであるが、そのいづれもが、彼自身の生に源泉を持ち、それぞれに活潑であ

るとともに、互ひに交錯して、あるひは協同しあるひは競合しながら、時には両立しがたきまでに充ぶりあつてゐるのである。⁽²⁾

一—二 心的聯関としてのこの兩方向は、彼がイエーナに落着いてからは、こんどは彼の公けの活動の中で、それぞれに、ひとつひとつの文書として、客観的に、——たとへば、論評とか著述とか講義とか、あるひはそれらのための草稿といふ具体的な形で——外に、刻み出されてくる。といふのは、キムメル博士の作成した『イエーナ時代の文書年表』⁽³⁾を一応前提し（——その中で、同博士は、この時期の諸文書を、ノールの方法を踏襲しつつ時間の順序に配列してゐる——）、そのうへで、そこに記載された文書の内容をいちいち吟味してゆくと、それらは（書簡や抜萃の類は勿論別としてであるが）、おのづと囊のふたつの意欲傾向に対応して、体系的ないし体系の各論的企図に属するものと論評的活動に属するものとの、そのどちらかとして規定出来、またどちらかへ分類出来るからである。——もつとも、最初の公刊論文『フィヒテ哲学体系とシェリング哲学体系との差異性』⁽⁴⁾（以下『差異性』と略記）は、同一の書物の中に囊の兩方向を織りこんでゐる点では、いくら特殊である。

しかも、これらの論定を維持しつつ、次に、諸文書の個別的な内容からその成立時期の方へ、吟味の焦点を（十分に批判的な態度で）⁽⁵⁾転じてゆくならば、そのとき、「体系構築的」および「論評活動的」といふ前述の徴表は、単にイエーナの諸文書を内容的に分類するうへで有効なばかりでなく、こんどは、この時代の彼の活動をいくつかの時期に区分するための、実に重要な尺度になり得ることが判明するのである。

——すなはち、イエーナに來住してから暫らくのあひだ（だいたい一八〇一年の初秋のところまでは）、彼のふたつの活動方向は両立し得てゐたやうに思はれる。といふのは、彼は、たとへば一方において、『ドイツ国憲法論』の草稿に推敲を加へながら、他方では、前記の『差異性』を執筆し刊行してゐるし、あるひは、教授資格取得論文『遊星の軌道について（De orbibus planetarum）』を公けにして大学での開講に備へる一方、『エルランゲン文学新聞（Erlanger

『Literatur-Zeitung』へ書評を寄せてもゐるからである。この両立の時期がいれば初期である。

しかし、この年の晩秋以降、彼はシェリングとの共同編輯で、かの『哲学評論(Kritisches Journal der Philosophie)』を刊行し始める、そしてこの仕事は、元来ゆつくり且つ強靱に仕事を進めるた、のヘーゲルから、約一年半にもわたつて、おほかたの時間と努力とを奪ひとる結果になる。むろん、この間と雖も講義のための草稿は絶えず作成されてゐたに相違ないが、彼が多少の余裕を以てふたび体系の各論又は総論の構築に向ひはじめたのは、漸くあくる一八〇二年も秋以降のことであるやうに見える、『ドイツ國憲法論』のための抜萃があらためて作られ始めるからである。しかし、一八〇三年の五月には、『哲学評論』は突如として停刊し、それは結局廃刊につながつたのであつた。論評活動が中心のこの時期が、イエーナ時代の中期にあたる。

——爾後、一八〇七年の早春、最終的にイエーナを離れる頃まで、彼は仕事の面では、こんどは、逆に、体系の構築に没頭する。^(?) 体系の各論、ついで総論ないし原理論(論理学と形而上学)、さらに序論(『精神の現象学』)の逐次的構築に、ヘーゲルがいかに心血を注ぎ精根を傾けていつたか、後期におけるそのやうな集中と緊張の経過を、あの『文書年表』は歴然と提示してはゐないであらうか。

してみると、イエーナでの六年余は、ヘーゲル自身の関心と活動とが内容的に移動してゆくにつれて、おのづと三つの時期に分節するのであり、従つて吾々はそれに応じて、この地での彼の論評活動は、その中期の一年半、『差異性』が現れた前後から数へてもせいぜい二年、といふ比較的短い期間に、集中的に出現したのである、といふふう論定して差支へないであらう。

——三 それ故、彼の論評活動は、時期と期間といふ事実関係については、たしかにここに劃定され終へた、しかもそれは、伝記作成における・単なる年代決定の如き無味なものとしてではなく、この活動なり関係文書なりを、表現として、即ち、彼の個人的生に発源する・あるひとつの(自己拡大的)心的聯関のその表現として、理解しようとする

する試みを通じて、劃定されたのである。——しかし、その限りにおいて、そしてその故にこそ、表現¹理解の次元においてであれ、事実関係の單なる劃定や把握にとどまつて安きを偷^ゆむやうなことは、吾々には断じて許されてゐない、寧ろ更に進んで、この論評活動の意味¹といふものを、生^{レイヴ}の聯関においてであれ理念の聯関においてであれ、問ひ求め且つ問ひ詰めてゆかねばならないであらう。——

それでは、意味への問ひがそのやうに、およそ必須の問ひであることは確かだとしても、次に、そこからどのやうに、具体的な意味可能性に向つて問ひ進むべきであらうか。事実聯関としてのこの論評活動が意味づけられるのは、いつたい何処からであるか。——たとへば、彼の個人的生の全体（即ち生涯）に対して、その意味を問ふ場合には、それはその時はたしかに熱^{フヤイヤシム}狂^{シム}的に遂行されたけれども、所詮は青年時代の一場の偶然的挿話^{エピソード}でしかなかつた、とか、彼の多彩な才能を示す余技のひとつであつた、とか、あるひは、彼の生の發展を爾後本質的に規定していつた・ひとつの基礎的体験である、とか、様々の解釈が成り立つて来よう。むしろ、歴史的社会的生からの解釈も、つまり、彼のこの活動が現實に何を成就したかを当時の精神的狀況の中で判定しようとする試みも亦、少くとも同等の權利を以て遂行され得ねばならない。

更にまた、個人的ないし社会的^{レイベン}生といふ事實的經驗的な聯関から、理念の本質的聯関に移つて、これら論評關係の文書が含むその都度の思想内容を、纏て構築されていつた・後^ちの体系と關係づけるならば、それらにはどういふ意味が与へられるであらうか。それらは、哲學的内容から見れば、単に非學術的（*außerwissenschaftlich*）な雜文の類ひなのか、それとも、体系の中へ積極的に止揚されていつた契機なのか、あるひは、要するに玉石混淆であつて、体系の構築にどこまで寄与したかに従つて、ひとつひとつ取捨さるべきであるのか。——意味への問ひは、このやうに、まつたく様々な方向へ問ひ進めることが出来るのである。従つて、何よりも先づ要請されるのは、さういふ多岐多様性の中へ徒らに拡散して自己を見失つてしまはないこと、いな、むしろその逆に、この問ひの内的緊張をその根源

にまで只管累乗させてゆくこと、それであらう。そしてそれは結局、意味へのこれらの問ひを間断なく繰り出しながら同時にそのつど内容化してゆく所の、問ひそのもの手もと足もとにある或る全体的なもの、その挙示を要求することになるであらう、それについての方法論上の反省に、ないしは基礎づけに、立入つてゆくだけの余裕は、いまここにはないけれども。

一四 (1) およそ、生^{レイブ}または理念^{イデア}における・いかなる聯関も特殊相も、これを、特殊なまま個別的なままにではなく、意味的に理解しようとするならば、このやうに、結局、その解釈がそこから着手されそこに帰趨する原点をこそまづ挙示しなければならなくなるであらう。そしてヘーゲルの場合、われわれは、『大論理学』およびその事實的成立を以て、解釈のさういふ根源と看做すことにしよう。それは、理解の可能性を最も遠くまで開く地平であるかのやうに思はれる、しかもそれは、彼の体系の構造が、そのすべての實在的過程が始元(即ち『論理学』)に還歸する円環をなしてゐる、といふ理論的思弁的な意味においてだけでなく、体系の構築が實質的に概成したのは、実はその基礎づけの部分たる『論理学』の(「有^イ本質^イ概念^イ」といふ)輪廓が定まつた段階でのことである(つまり、始めは最後に現れたのである)、といふ発展的な意味あひにおいてもさうなのである。——従つて、このやうな展望のなかでは、イエーナでの論評活動も亦、究極的には、『大論理学』の柱礎はどのやうにして定まつてきたか」といふ包括的な問ひを遂行するなかで、その一端として理解されることになるであらう。

(2) しかし、彼の論評活動の意味を更に規定的に問ひつめてゆくためのその場所が、このやうな展望であるとしても、それでは、論究の次の手続きはいつたいどういふことになるであらうか。——われわれは先ほど、彼のこの活動を単なる事実として劃定しようとはしないで、むしろ、個人的生とその表現といふ、直接的知覚可能性を超えた體驗聯関の方から、その事実關係をも理解しようとして試みたばかりであるけれども、事実に対する體驗のこの超越性と類比的に、いまや、彼の論評活動における思想的哲學的内容を、まづ、心的體驗ないし伝記的聯関の制約から解き放ち、

理念的聯関、それ自身として、主題的に問ふべき段階にまで到達したやうに感ずるのである。といふのは、そのやうに對自化したときの哲学的内容は、当然、『大論理学』(ないし、先づは『精神の現象学』)との純粹に概念的な聯関に齎され、それを通じて又そこから意味づけられる概念的可能性となるのであるが、しかもその結果、彼のこの論評活動が実は、イエーナ時代以前から遠くニュールンベルク時代にまでおよぶ雄渾雄勁な思索運動のその一齣であること、即ち、「実体から主体へ」向つて脈打ちながら展開する精神的、生のその表現として意味づけられること、このことが判明するからである。そしてこの精神的生の聯関が、単に心的ないし個人史的な体験聯関は無論のこと、社会的文化の生の聯関からも独立し自律的であることは、あらためて言ふまでもないであらう。

(3) とはいへ、まさにそれ故にこそ、論評活動の思想内容を對自化する、といふこの論究は、たとへば次のやうな試みからは、即ち、豫め固持されてある・なにか「ドイツ觀念論の系譜」の如き図式によつて、關係文書の中から所謂「力作」のみを篩ひわけ、それら「力作」をしか顧みないたくひの研究からは、嚴格且つ入念に區別されねばならない。況んや、「力作」の中に又しても、彼の後の体系を傳會するのに好都合なやう、「根本的」概念なるもの——これとても、そのじつ、ただ己が先入見・己が好みに適ふが故に、無批判に拾ひあげられた出自不詳の觀念に過ぎぬ——を縱のままに隨時隨処に想定し、かうして「解釈」の粗筋を仮構するやうな、さういふ独斷的な企てに対しては、それは、いかなる假借をもなしえない。(それら過剰な思弁は、いかに屢々、片言隻句に固執しての牽強附会に陥つてゐることだらうか。)

たしかに、論評活動の思想的内容を對自化するためには、心的ないし個人史的な聯関をまづ超出しなければならぬけれども、しかしこの論究が、およそある思想内容を、それが特定の状況のもとでそのときに生きた文脈そのままに、鬚髯とさせる努力でもあるべきことに關しては、心的聯関から理解する叢の場合と聊かの変わりもないのである。従つて、さういふ反省を経たとき、かの對自化は、まづ次のやうな問ひになつてくるであらう。

——すなはち、(i) 関係文書の内容がいかに多様多岐に互り、また晦渋を極めてゐようとも、更に価値的には玉石混濁であらうとも、そもそも彼の論評活動の根底には、一貫した或る基本姿勢があつて、それが、この活動の生み出したテキストをすべて、それ故力作をも、雑文をも、悉く、ある特定の仕方で一様に性格づけてゐるのではないだらうか、もしさうだとしたら、その基本姿勢とは、いかなるものであらうか——さういふ問ひがまづ問はねばならないであらう。

しかし、純粋な理念的聯関に到達することが対自化の目標である以上、さういふ基本姿勢を問ふといつても、それは、曩にいつたん超出した個人史的ないし心的体験的聯関の方向をもう一度探究し直して、たとへばあの自己拡大的志向にふたたび歸り着くことではあり得ないし、勿論さうなつてはならないのである。(ii) むしろ、はるかに包括的な文脈から彼の論評活動を動機づけてゐる・いまひとつの、非理念的な、現実的經驗的聯関、すなはち歴史的社会的生の聯関の方向を問ふことになるべきである、といふのは、彼のこの活動が、どこまで又どのやうに、その時代の現実的状況によつて規定されてゐるかを解明することなしには、かの理念的聯関は、いかに心的個人史的聯関の制約から解放されてゐようとも、なほ未だ決して純粹に自体的に現象すべくもないからである。

二 時代の状況と對人關係

二一 およそ、十八世紀の最後の年(つまり一八〇〇年)を挟むわづか数年の間のやうに、同じドイツの中で、思想的精神的対決が煮え滾り煮え返り、しかもそれが夥しい数の雑誌や新聞や年報・年鑑などの、その計画・創刊・停刊そして廃刊となつて溢れ出した時期は、他に類例がないであらう。(H・ブフナー)——それは、何といふ目まぐるしさ慌しさであつたらうか。シラーが主宰してゐた『タリニア』および『ノイエ・タリニア』の消長はもとより、『ホーレン』(光彩陸離、これほど絢爛たる執筆陣を敷きえた文芸誌は、おそらく文学史上、空前絶後であらう)その

『ホーレン』の盈虚でさへも、すでに遠い過去の出来事になりつつあつた、といふのは、いまは、フィヒテ、ニータ
ンマーたちの『哲学雑誌』、シュレーゲル兄弟らの拠点『文学公論』、それに加へてかの『アテノイム』までも次々に
廃刊または変質してゆく一方で、ラインホルトの『寄与』、さらには『エルランゲン文学新聞』や『思弁的自然学雜
誌』などが続々登場し、それらいちいちの浮き沈みに目を奪はれるやうな情勢になつてゐたからである。⁽¹²⁾ 三号雑誌が
氾濫するかういふ状況のまつただ中に、いはばワン・ノヴ・ゼムとして出現したのが、かの『哲学評論』なのであつ
た。

たしかに、浮沈転変のこの速さ激しさの、そもその根源にあつたのは、ただ移り気な、あるひは真似好きな国民
性、といふやうなものではなく、純粹に精神的なエネルギーの、凄まじいばかりの噴火であつた。すなはち、ふたつ
の精神的潮流が——(1) 疾風怒濤^{シトルム・ウント・トランシツ}時代から古典主義を経て、いま漸く浪漫主義に極まらうとする文学運動と、
(2) 批判哲学から受けた深刻な衝撃を、いづこへ向けて打通せしむべきか、解積の突破口を求めて^{ひしめ}奔走^{ひしめ}あつてゐた・哲
学の諸動向とが——このふたつの潮流が、いくたりかの天才(たとへばシラー)の内面的苦闘に媒介されて、個々の
精神の内側においてばかりか、精神相互の間においても積分され、いはば核融合を遂げたのである。この融合の中か
ら噴き出された無数の靈感、感動、熱狂と幻想——それらの渾沌は、入りて酔はぬ者としてなきベッカスの祭にも譬へ
うるであらう、しかもまた、大家と新人、燦然たる泰斗と無数の星屑とが才能の限りを尽して競ひ合つてゐた限りで
は、かの「精神的動物の国」にも較べうるであらう。しかしいづれにせよ、知的世界の一員たる限り、この興奮と熱
気の中に吸ひ寄せられてゆくことは避け難いことであつた、同時に、才気を誇るひとびとの人間関係——意気投合と
幻想、幻滅、不和と亀裂、袂別・対決・敵意——のその中に巻きこまれてゆくことも亦、いかんともし難い運命であ
つた。(抑々この渦の中には、ヘルダーリンのやうな繊細柔和な魂をさへ、深く、癒え難きまでに傷つける^{むし}酷さ、
無慈悲な棘^{とげ}が隠されてもゐたのである。⁽¹³⁾)

二二二 それでは、そのやうに純粋な精神的沸騰の中から、いつたいどうして、何がきっかけとなつて、現在のごとき・三号雑誌の氾濫する状況が生み出されたのか。——この問題をそれ自体としてとりあげるならば、われわれは、文学史の・更には精神史の聯関の内部へ、深く深く立ちいつてゆかねばならなくなるであらう。しかし、ヘーゲルの論評活動の意味理解が現在の研究課題であるから、ここではむしろ簡捷をむねとして、次のやうに問ひ代へても——即ち、この渦の中に巻きこまれてゐるといふだけでなく、進んでそこへ身を乗り出し自ら当事者とも成つてゐたシェリング、そしてヘーゲルは、さういふ現状をどう理解してゐたのか、と、さう問ふことにしても、差支へないであらう、彼らの念頭に浮んだ限りの情勢把握こそ、爾後の彼らの活動を大きく規定していつたに相違ないからである。それは、どういふ判断であつたらうか。

(1) まのあたりのこの精神的無政府状態こそ、カントが口火を切りフィヒテが起爆させた哲学革命の、その当然の帰結にほかならない。ここでは、自分で考へる、思惟により權威を乗り越えて独立する、といふ哲学の本来的自由が、「既存の哲学に基いて哲学者と名乗るがときはまさに不見識である、何から何まで自分で新たに仕立てた体系を持つのが当然のことである」といふ意味に理解されてゐるのである。特にフィヒテ以来、哲学といへば、どんな原理からどのやうに始まらうとも、必然的に体系にまで展開してゆくものだけを、少くともその始元が体系全体の絶対的原理として提出されてゐるもののみを、指すやうになつた、従つて、どんな些末なものであれそれを原理として見いだしうるほどの者は皆、自分の手で自分を哲学者に仕立て、しかも自分の哲学だけがただひとつの正当な体系であるまで確信することになる。その結果が、かうも夥しい原理や体系のその簇生なのであり、また、それらが鬨ぎあふ・かうもかまびすしき怒号なのである。たしかに、表面的には、アカデメイアなどで才氣煥発の生ける群像がのびのびと育ちつつあつた往昔のさまを想はせるものもありはするが、實在してゐるのは、有限なものに、あるひは繋ぎがれあるひはそれに次々と手を伸ばしては捨ててゆくやう、永劫に呪咀された者たちの狂奔と苦惱とに他ならない。

(Werke IV, S. 120~121, u. S. 188.)——しかも、そればかりではない。

(2) この無政府状態は、いまや知的世界の外へも溢出して一般民衆までも巻きこみ始めてゐる。といふのは、かうも夥しい体系がいよいよ目まぐるしく隆替するさまを前にしては、さすが民衆の忍耐にも限度が来たからである。もともと民衆は、彼らの理性に対して司祭の任務を持つ哲学者たちの、その毎度の口約束に、つまり、今度こそ「誰々の」といふ名前のつかない・普遍妥当的な哲学、そのものを、実現して見せるぞ、といふ安請合ひに、その都度期待をかけて、二千年以上も待ち続けて来たのだが、つひに彼らは今後六千年待つてゐても空しいであらうことを悟りはじめた。だからこそ、かうまで長いあひだ自分たちを愚弄して来た思弁哲学の、その凋落ぶりを目のあたりにして、民衆の中に歓喜の聲が爆発してゐるのである。彼らが現代の懷疑論者シュルツェ⁽¹⁴⁾を救世主のやうに迎へるのは、この人が、権力を奪ひ合ふすべての体系を、マラーのやうに一律に断頭台にかけたからであるし、他方、ザラートのやうに經驗的基礎しか持たない通俗的道德哲学者、つまり非哲学が、「司祭」に代つて民衆善導にまします勢ひこんでゐるのも、同じ背景からである。——かうして、怨恨^{ルサンチマン}のためにせよ、お節介のためにせよ、哲学に関与する群衆の数は膨れあがる一方となり、知的世界の内部ばかりか、民衆の精神生活のレヴェルにおいてまでも、喧騒また喧騒、耳を聳するばかりになりつつある。そのまつただ中にて、喧囂^{ノイズ}の中から何かを聞きとるためには先づ何をなすべきであらうか。——以上が、シェリングおよびヘーゲルに共通の情勢把握であり状況判断であつた。(Werke IV, S. 188, u. S. 257~261)——

(11) しかも、それに対して、われわれはここで更に、次のやうな自注を加へることが出来るであらう——特に興味を惹くのは、彼らが、このやうな状況判断を形成してゆくにあたり、そのための有力な補助線(の少くともそのひとつ)として、ライン河対岸における政治情勢(革命の、無政府状態への激化)と此岸の哲学革命の推移との間に、類比關係を頻りに構成しようとしてゐることである。つまり、彼らがいま身を以て日々実感してゐるところの、この三号雜

誌の氾濫や甚だ品位を缺いた口論筆戦のたぐひは、公安委員会や革命裁判所や断頭台といった屍山血河の展開と對比したとき、きはめて理解しやすくなる体ていのものであつた、といふことである、と。

しかし、さういふ注記が幸ひ承認されたとするならば、こんどは、われわれ自身が次のやうな補助線を引いて、次段への前進に見当をつけようとすることも亦、彼らの意嚮に適つた解釈として、許されるであらう、すなはち、次ににおいては、とにかく権力の回収と集中とが始まつて無政府状態が收拾(15)されつつあつたのであるが、それにこちら側で対応してゐたのは（そして対応するものが存在すべきであるのだが）いかなる動きであつたらうか——そのやうにわれわれ自ら設問しても決して的外れにはならないであらう。

二一三「学ツツシヤントの土のうへに播かれた・数こそ少いが品質の良い種子を、勢ひよく蔓る雑草によつてたちまちに枯らされてしまひたくないのでしたら、至急、そして自分のあひだ、学を厳格な保護のもとに置くことが絶対に必要だ、と思はれます。……二、三年のあひだ厳格な論クラシイク評を続けて、哲学の領域にある饒舌家どもを沈黙させ、〔哲学のために〕もつと良い席をしつらへることは、十分可能なことでありませう。——シラー宛てのこの書簡は、一八〇〇年十二月二日の日付けになつてゐる、従つてヘーゲルが未だイエーナに到着してゐない時点でのものであり、しかも発信者（フィヒテ）がここで彼なりの理解において語らうとしてゐたのは、彼とシェリングとの間に企画されてゐた新論評誌のその趣旨なのである。それがどうして、いよいよ創刊のときには、共同編輯者が、フィヒテ（つまり、かの精神的無政府状態アナルヒエの一方の責任者）から新参のヘーゲルに交代してゐたのであらうか。——その間の事情を、ブフナー博士の詳細且つ周到な研究を基礎にして調べて見よう。⁽¹⁶⁾

(1) このころ、イエーナの御念論者イデアアクトロ・浪漫主義者ロマンチイザムグループは、実際には、彼らの方も亦、論評誌といふ形式によつて、発言と応酬との場所を知的世界の激動の中でたえず確保してゐなければならぬやうな、さういふ相対的立場に立つてゐたのである。この要求にこたへる動きのひとつが、テュービンゲンの書肆コッタの企画であつた。この出版社

はずでに一七九八年、ある新綜合雜誌——いつそうリベラルで、しかも哲学・科学・藝術といった領域的區別には囚はれないところの——の創刊を、シェリングに提案してゐる。

この計画の推進にまづ積極的に乗り出したのがフィヒテであり、彼は、一七九九年の晩秋の頃、促進のためわざわざイエーナまでシェリングを訪ねてゐる、かねて共同編輯者に豫定されてゐたシェリングが、仕事の都合でいつたんは計画の延期を希望したものの、翻意して協議のための来訪を請うたからであつた。——かうして、フィヒテは、この年の暮には自分の成案を同人どうじんに示して承認を求める段階にまで漕ぎつける。しかし、この折角の草案も、さらにその代案もまた、何処からも（シェリングからさへも）積極的応答が得られない、彼が提示した趣意そのものは、理想主義的で潔癖なものであつたにもかかはらず——即ち、まづ哲学、藝術、科学それぞれについて明確な理念をば樹立し、ついでこれを尺度として時代の思潮を論評し、以て秩序と静謐とをこの知的無政府状態の中へ齎らさうとするものであつたにもかかはらず、である。

いつたいてうして、何が原因となつて、彼のこの訴へは、いはば同信の友たちをさへ動かさし得なかつたのか。——フィヒテの構想では、新論評誌の編輯同人たちは一種の独裁的君主体制モナルヒーの中に組み込まれることになつてゐた、つまり、副編輯者はそれぞれの責任領域において、編輯主幹は雑誌全体について、投稿寄稿のすべてに對し、採否はもとより削除や変更の権限までも無制限に与へられることになつてゐた、従つて編輯主幹は、副編輯者の決定に對してさへ生殺与奪の力を行使できるのである、しかも、この独裁的編輯主幹の地位にフィヒテが自らみづかを擬してゐることは明瞭であつた。グループに共通の共和主義的感情が、このやうな専制的君主体制にも、いささか無邪気にすぎる自薦にも、鋭敏に反撥したであらうことは、想像に難くないのである。——たしかに、ライン河の此岸でも、革命の終りが、そして絶対的なものへの胎動が、このやうに既に始まつてはゐた、しかし、この知的無政府状態が新しい体系の中へ争あらがひがたく收拾されてゆくまでには、なほ暫くのあひだ、相對の中での労苦が忍ばれねばならぬであらう、つまり、

三号雑誌の洪水はいま少し退くことではないであらう。——

(2) 一八〇〇年五月、『超越論的觀念論の体系』⁽¹⁷⁾をつい先日完成したばかりのシェリングは、かのラインホルトがヤコービ、バルディリと結んで、バルディリ説の広場として雑誌をひとつ企画してゐるむねを耳にした。それが自分の思弁的觀念論への新しい攻撃になることを危惧して、彼はフィヒテに、「非哲学 (Unphilosophie) のあの新しい形式と戦ふ最前線」⁽¹⁸⁾を急遽結成することを提案する。しかし、フィヒテの態度はむしろ消極的であつた——彼は既に他の可能性を摸索しつつあつたのである。こんどは、シェリングがフィヒテを追ひかける番である。かうして双方の思惑がなかなか噛み合はないのであるあひだに、かへつて訣別の日が来たのであつた。

(3) シェリングもフィヒテも、どちらも、相手の協力を得ることが、自分の論評誌を創刊するうへでどんなに重要なことか、それは知りぬいてゐた。しかし、だからといつて、さういふ戦略的見地を、原理的に論明すべき問ひが顕勢化して来た場合にも、相変らず優先させるといふやうなことは、これ亦両者とも、到底なしえない所であつた。(その意味で、彼らの心情はいづれもラディカルだつたのである。)——いくたの紆餘曲折を経て、漸く両者共編の新論評誌がコッタ社から刊行される機運になつて来た一八〇〇年十一月、シェリングは、フィヒテに礼状を認めて、彼の加入に謝意を表はした、しかもその同じ書簡の中で、彼は知識学に或る根本的な疑問を呈するのである、非我に矛盾的に對立しつつしかもこれを支配しようとする超越論的自我、さういつた概念は、真に絶對的な絶對者にはふさはしくないのではないか、觀念論^{イデアリスムス}よりは寧ろ反省哲学に帰属すべき概念なのではないか、と。⁽¹⁸⁾——当初、この論議を調停することは、なほ可能であるかのやうに見えてゐた。たとへば、フィヒテは、その少しあとで、更にゲーテやシラーまでも参画させようと試みてゐるほどである。(二七頁の書簡を参照)しかし、一八〇一年五月、つひにフィヒテはシェリングに宛てて協力關係を批判的に清算する旨の手紙を書く、そして長い躊躇^{ためら}のち、これを發送したのが八月七日のことであつた。かうしてシェリングは、ここで学説上からも先輩のフィヒテより獨立して一家を立てるに

たるのである。

(4) さて、フィヒテへの・彼の問題提起からここにいたるまでの期間を、こんどはヘーゲルを中心にして見直してみよう。——一八〇〇年十一月といへば、ヘーゲルはフランクフルト・アム・マインにゐて、遠くイエーナに思ひを馳せながら旧友シェリングにあのやうに打ちとけた手紙を認めてゐる時点である、しかも、イエーナに來住した彼が、フィヒテとシェリングとの哲学上の差異性を公開的に指摘した所謂『差異性』論文には、一八〇一年七月付けの序言が添へられてゐる。してみると、この約九ヶ月間は、シェリングにとつては、ひとりの偉大な友が遠ざかつてゆくとともに、入れ代りに、同郷同窓をして同信でさへある旧友があらためて盟友になつてくる時期であつたのである。そして、シェリングが、「非哲学」との対決を主眼とした新論評誌を、フィヒテを缺いたままでも刊行することを決心したとき、ヘーゲルの名が共同編輯者として彼の念頭に浮んだのは、ごく自然な成行きなのであつた。——『差異性』の趣旨は、従つてヘーゲルがシェリング哲学の獨創性のこよなき理解者であるといふことは、おそらく平素の往來などを通じて、この著作が公刊される前から既に、シェリングの熟知する所であつたらうし、批評家としての彼の力量も、シェリング自身が斡旋した・ブーテルヴェークの著書への書評によつて、検証済みであつた。

いつぼう、ヘーゲルの方でも、共同編輯への誘ひに即応するだけの心の用意は整つてゐた、いな、それどころか、彼のうちにもともと存在してゐた・言論活動へのあの遠心的な意欲、時代の子にならうといふ自己擴張の志向は、この好機を決して逸せしめはしなかつたであらう。彼は、教授資格取得試験(Habilitazion)における公開討論(Dissertation)のその前日に、前日であるにもかかはらず、仕上げたばかりの前記の書評を發送するほどに、論評活動に重きをおいてゐたのである。——かくして、シェリングおよびヘーゲルの共同編輯のもとに、『哲学評論』の創刊号が書店の店頭に現はれたのは、一八〇二年の正月である。それは、いはば、ジャーナルの数をもうひとつふやすことによつて、この三号雑誌の氾濫を終らせようと自負するものであつた。

二一四 (1) このやうに、その成立経過をごく大まかに辿つて見ただけでも、われわれは直証的に理解しうであらう——『哲学評論』が、その根本の姿勢において、まづ論争的(ディアルクティック)とならざるをえなかつたことを。それは、当初の構想と比べるならば、たしかに、実現するまでの過程において、両輪の一方が学界の重鎮から無名の新任講師に交替し、またその前提をなすグレンゼンシャフト 学ヴェルケン の概念が決定的に分岐する、といふやうな変貌を遂げたけれども、その本来の意図において、即ち、非哲学に対してみづから宣戦し最前線に立つて戦ふところの、戦ひのための文書である点では、終始一貫してゐた。それは、自己を主張しぬくための論評誌(ジュルナル)であつて、およそ、新人の登竜門であらうとしたり、対立者双方に公正に発言させる非党派性を志したりするものではなかつたのである。そして、この論争的戦闘的といふ点では、イエーナ中期のヘーゲルの活動は(『差異性』や『エルランゲン文学新聞』での書評をも含めて)、彼の推輓者であり先任者であるシェリングのそれを教段上回つて、徹底的(ラディカル)であり、また執拗でもあつた。この「断定する人間(ein gar kategorischer Mensch)」の熱意には、たしかに、シェリングが期待してゐたより以上のものがあり、その舌鋒は論敵に対し酷薄をきはめ、間々人身攻撃(argumentum ad hominem)にさへおよんでゐる。そもそもいぢばん始めの論評の際に、彼は、仮初(かりそめ)にも或る学説について論ずる場合には品位と和氣とを以て、(mit Anstand und in Frieden) 行ふのが適切であらう、といふブーテルヴェークの提案を、このやうな著書を批評する者はすべて喧嘩腰にならざるをえないのだ、と邪慳に払ひのけてゐるほどなのである。(Werke IV, S. 95)⁽¹¹⁾

(2) シェリングは、ヘーゲルほど戦闘的ではなかつた、むしろ、論評といふものに自分なりに節度を設けてゐたやうに見受けられる。ヘーゲルの鋭鋒が、非哲学にだけでなく、次第にシュライエルマッヘルなど自分の友人にまで及んでゆくを見て、彼がいささか当惑してゐたのは、⁽²²⁾その実例であると言へよう。——しかも、『哲学評論』に対する彼の熱意そのものが、実はさほど長続きしてゐない。それは、この新論評誌に対する彼の貢献の実態を客観的に吟味してみると、歴然としてくることである。その点をここで、もう一度ブフナー博士の考証に——特に、各掲載論文

の執筆者は誰か (Autorschaft)、また各号の発行時期は何時であつたか (Datering)、といふふたつの問題についての、その慎重な論定に——依拠しながら、論明してみよう。

第一巻の第一号および第二号では、両編輯者は、執筆の勞をだいたい平等に分ちあつてゐる。しかるに、次の第一巻第三号をば殆ど自分ひとりで手がけたにも拘らず、シェリングは爾後一転して、第二巻の合計三冊(約三四〇頁)に対しては、『ダンテ論』その他わづか二八頁をその第三号に寄せたにすぎない。もつとも、この第一巻第三号は、ヘーゲルの『信と知』のみを載せた第二巻第一号よりも遅れて、第二巻の第二号と同時に、一八〇二年の暮に頒布されたのであるが、シェリング自身の言葉によれば、その印刷はこの年の秋には既に終つてゐた模様である。しかし、さうなると、『哲学評論』に対する彼の實質的貢獻は、せいぜい遅くまで見積つても、一八〇二年の秋の半ばには(第一巻第三号への執筆を以て)終熄したことになるはしないか——創刊以後おそらくまだ十ヶ月にもならないのに、しかも筆頭編輯者の寄稿が、である！ そして結局、彼の通算執筆量は、かの執筆者問題を彼に最大限に有利になるやう解釈しても、なほ全体の四〇パーセントにしか達しないのである。⁽²³⁾ 彼のこのやうな相対的消極性は、いつたい何に基因するのであらうか。

(3) たしかに、創刊号の時点では、シェリングは、この論評誌に積極的であつた、それに疑ひを差挿む余地はないやうに思はれる。——前述のやうに、そもそも新論評誌の創刊へ彼を駆り立てた直接の切掛は、ラインホルトが新雑誌の刊行を企ててゐるといふ情報であつた。事実、それは『寄与』と名付けられて、一八〇一年の正月以降、逐次、世に出はじめた。従つて、『哲学評論』が難産の末やつと誕生するまでの、それからの約一年間は、シェリングにはさぞかし長く感じられたことであらう。そのせいもあつてか、この創刊号に早速、いかにも待ちかねてゐたかのやうに、彼は、対話篇『同一性の絶対的体系と、最近の(ラインホルト的)二元論に対するその關係とについて』、そしてその補説『ツェッテルからスクヴェンツへの手紙』を掲載してゐる、即ち、第一巻第一号のその劈頭で、彼は一

気呵成に年来の論敵と対決したのである。結果的には、それは、『哲学評論』への彼の寄稿のうちでも最も長篇の、それも図抜けて長い論文の公開であつた。⁽²⁴⁾——しかし、このやうな積極性が実際には長続きしてゐないのであるから、そこには相当の事情が存在しなければならぬであらう。

それは、首途^{かど}にあつて先づ力作を発表したために、かへつて、目的の大半を既に達成してしまつたかのやうな安堵を彼自身が覺えたからなのだらうか。つまり、懸案の一応の解決が、緊張の爾後の持続を不可能にした、といふことではないだらうか。あるひは、『寄与』の実態は、彼がもはやそれ以上応酬し反撃する必要のない程度のものであつたかもしれないし、『思弁的自然学雑誌』がこの同じ一八〇二年に廃刊となつた経過に氣を奪^とられ、⁽²⁵⁾余事がおのづと消極的に流れていつたのかもしれない。——だが、『哲学評論』への彼の熱意が薄れていつた根底には、さういふ心理的可能性や對社会的諸關係もさることながら、もつと本質的で内面的な、いな、寧ろ精神的な事態をこそ、まづ、読み取らなくてはならないのである。——

(4) 実は、世紀があらたまる前後からのこの兩三年こそ、シェリングの学才が、^{かがや}煥き出でつつその生産性の絶頂にまで登りつめた時期なのである。『超越論的觀念論の体系』(一八〇〇年)以後も、『私の哲学体系の叙述』(一八〇一年)、『ブルーノ』(一八〇二年はじめ)、それに『思弁的自然学雑誌』への論文数篇(一八〇〇—一八〇一年)が逐年公刊されて、知的世界の話題となつた。しかも、一八〇二年の夏学期、講義『大学における學術研究の方法について』は夥しい聴講者をあつめ、その反響に氣をよくしたシェリングは、⁽²⁶⁾公刊のための仕事に着手するのである。つまり、彼は、積極的表出を次々に迫つてくる哲学的諸理念を、自分の中へ片端から迎へ入れては、これを逐一構築して送り出してゆく創造的産出のまつただなかにゐたのであつた。——

しかし、そのやうにいはずは神徠に捉へられてゐるものにとつて、非哲学との戦ひで鎬を削るといふことは、どこまで又いつまで意義を持ちつづけるであらうか。むしろ、さういふ超越的な活動を直下に体験すればするほど、いよいよ

よ非哲学のごときにいつまでもかかづらばつておれなくなるのではないだらうか。——事実その方向に、創刊号以後の彼が傾斜していつたことは、のちにヴェルツブルクで刊行された『科学的医学年報』(一八〇六年)の序言からも、十二分に確認できるのである。(27) すなはち、其所で彼は、回顧し展望し且つ断案してゐる——非哲学ないし反省の文化が一国の精神的中枢にまで侵入するやうな事態は、痛烈な反撃をそれらに加へることによつて、防ぎとめられた、従つて、単に戦ふ(論評する)だけの時期はここに終了する。今はもう、いつまでも、曾つての無政府状態(Anarchie)のその遺物どもと争つてゐるときではない、真の哲学の地歩を固め、さらに、体系的構築といふ・哲学の本来的課題に向つて集中すべき秋である、といふふうだ。——従つて、このやうな状況判断のもとに、彼が論評活動をあへて、関心の中心から周辺へ後退させていつたのは、実は、彼の精神的生産がいよいよ最高潮に達しつつあつたことの裏返し(裏返し)の表現に他ならない。換言すれば、『哲学評論』を刊行した頃のシェリングは、「(非哲学を)論評する」といつても、本質的にはやはり、それを既に、自分の体系の積極的構築といふ・いつそ、大きな文脈のなかで、これとの聯関において、理解してゐたのである。

(5) それ故、彼の論評活動は、外の非哲学から唐突に挑戦されて、彼の内にはからずも生じてきた可能性ではあるが、寧ろ、体系への道を直くするための論評であり、いはば顕正のための破邪であつた。それは決して、それだけでひとり歩きをして単に論評のための論評となるやうな形式的可能性ではなく、自分が帰趨する先を心得てゐる活動である。その口調がいかに論争的(polemisch)であらうとも、それは、否定に否定を継いで何かを定立しようとする詭弁とも、また、ひたすら他人の挙げ足を取ることによつて自分をエトヴァスと伴(いっしょ)する似而非ニヒリズムとも、何の関係もない。——だが、さういつただけでは未だ、論評と構築とのあひだは、やうやく即自的に明かになつたにすぎない。それはシェリングの場合、更にどのやうに對自化されてゆくのであらうか。

(6) 前述のやうに、彼の体系は、この時期にはもはや、単なる形式的可能性の段階にとどまるものではなかつた。

それは、既に構図コンストラクションの域を脱して、いまや、まのあたりで營々と築造されつつある・現実的存在であつた。その文脈の展開には、彼自身の手で、ひとつひとつの作品を通して定在ステイションが与へられ、形象が具はりつつあつた。思想的本質がいれば現に、現実の中で対自化しつゝあつたのである。——これに対し、論評のほうは、『哲学評論』の成立が実証してゐるとほり、元來は、構築の運動が始まつてのち、外からの攻撃を機縁として、この運動の内に偶発した受身の可能性なのであつて、それは、自分だけでは、理念はもちろんのこと、いかなる内容をも産出しえない。従つて、体系の対自化（即ち一切の内容の理念化）が進捗すればするほど、論評は、それとは逆に、論評としての対自性（つまり構築に対しての自立性）を失つてゆかねばならぬであらう。もし仮に、論評が単に論評そのものとして、それ故、体系とは別個の可能性として、構築聯関の外に、それだけで（たとへば論評専門誌のやうな形で）対自化されたとするならば、たしかに暫くは、論評のための論評が成立してゐるかのやうに見えるであらうが、さういふ論評活動は、かへつて、理念の發展の如何によつて恣いままにいつでもその存立を覆くがされるところの・全く形式的で空疎な可能性に転落してゆかざるをえないであらう、これに内容を供給する道がすべて断たれてゐるからである。とどのつまり、シェリングでは、論評の活動は、対自化しつゝある体系のなかで、逆に非対自的になつてゆくいつぼうの可能性であり、積極的に保存される必然性を持つてゐない。といふのは、論評を論評としては尺滅し体系を閉ぢる（完結することこそ、論評の極致とも考へられるからである、蓋し、外には一切取合はないやうな、つまり問答法ディאלクティブの可能性を構造的に含まないやうな純粋自己同一性の体系を提示することこそ、たしかに、非哲学を論評する完璧な方法になりえようからである。

二—五 論評と構築とのあひだは、シェリングにおいては、このやうな具体的配置コンクレタ配置になつてゐる。それでは、それは、筆頭編輯者を遙かに凌ぐ激越さで、非哲学に筆誅を加へたヘーゲルにおいて、どうなつてゐるだらうか。——しかしこの発問は同時に、いまや次第にわれわれを、時代の状況や周囲の他者からの制約を超えた・ヘーゲル自身に特

有な思想聯関の中へ立ち入らせてゆくことになるであらう。――

(1) 論評活動を構築の聯関のなかで、理解する――この大筋では、シェリングもヘーゲルもさして異なる所はなかつた。しかし、この枠組（理解の即自態）に基いての、契機キヰクの配列キレないしその相互の様態キレの、つまり論評と構築とのあひだの、その対自的把握は、両者において根本的な相違があつた。どのやうな、又なにゆゑの相違であらうか。――ふたたび外堀の方から、即ち具体的状況の方から逐次理解を詰めていつてみよう。

イエーナに現はれたばかりのヘーゲルには、未だ、自分自身の作品として客観的に提示出来るやうな著述が――所謂業績にあたるものが――何ひとつなかつた。たしかに、思想的構築には以前から着手してゐたものの、この仕事は他の夥しい未定稿や抜萃ビツサイとともに筐底にとどめおかれてゐた――それがどこまで抄つてゐたかは容易に窺ひえないのであるが。⁽²⁸⁾つまり、彼は全く無名の一学徒に過ぎなかつたのである。教授資格取得の考試をさへ済ませてゐない立場でもあつた。さういふ彼にとつて、論評活動は、いづれにしても自分の思想を公表して世に知られるための、はじめての機会なのであつた、非哲学を薙ぎ倒すことが同時に、自分を客観的に定在させる第一歩だつたのである。――しかし、もしも彼の構想してゐた体系が、問答法の可能性を本質的に含むやうな構造になつてゐるとしたら、非哲学の否定（論評）といふこの始元は、もはや体系にとつて偶然的でも形式的でもありえないであらう。――

(2) しかも、ヘーゲルが馳せ参じた・イエーナの観念論者・浪漫主義者陣営は、群敵からの攻撃に対して鷹揚にしてゐられるやうな、安泰な立場にゐるのではなかつた。(二一三、(1) 論敵の客観的地位は、決して、彼らの罵詈雑言がそのまま的中するほど滑稽なものではなかつたし、又、何の報復もなしえぬほど無力なものでもなかつた、従つて、ヘーゲルは、業績や肩書や名聞など・持みうるいかなる防楯もないのに、いはば実弾が飛び交ふ実戦の場へ、いきなり、自己を投じたのである。

あるひは、彼が旧友の帷幕にあへて入つたのは、たとへば大樹の蔭に身を寄せるがごとく、この党派の威を借りる

ためであつたのだらうか、それとも、そこから高配当をあてこんでの投機であつたのだらうか。——断じて、否、である。そのやうな矮陋卑屈の心術ほど、およそ彼にも当時の教養人士にも無縁な心情は存在しないであらう。彼が、いかに不敵なまでに、自分の独立性を意識してゐたか。——彼の『差異性』論文のうへに「肥えた大きな蒼蠅」が一匹とまり、「シエリングは、彼の郷国からイエーナへ屈強な戦士を迎へて、フィヒテも亦自分の説には遠く及ばないのだと、驚き怪しむ公衆に對しふれまはらせてゐる」と評したとき、彼は憤然として、「さういふ報告を發した者は、言ひかたをどんなに穩やかなやうに言ひ換へて見ても、嘘吐き、(Lügner) としか言ひ表はしやうがない」と、しかも署名を添へてまで言ひ切つてゐる。(Werke IV: S. 190)——『哲学評論』全体で筆者名が添へられたのは、ただこの一箇所しかないこと、そして「嘘吐き」といふ罵詈が教養人士のあひだで何を意味するか、などを考へ合せたとき、ヘーゲルがここでいかに、自分の思想の自主性独立性といふものを、それだけは譲歩することの出来ない最後のものとして護りぬかうとしてゐたか、歴然としてゐるであらう。それ故、彼にとつて、論評とはまさしく自己の存在を賭けた主体的活動であり、余技でも副業でもなかつた、自己がまづ存在するための、自己を世界に拡張するための、真摯な実存的企投なのであつた。——われわれはかくして、彼、自身の居る場所にやうやく近づいてきたやうに思はれる。

(3) それ故、『哲学評論』をはじめとするイエーナ時代の論評活動は、彼にとつて、まさしく懸命の、一所を意味したのである。——直面する状況からしてすでに、彼はさう覚悟せざるをえなかつたであらう。たしかに、彼に与へられた最初の機会チャンスは、自分の体系を積極的に公開するためのものではなかつた、つまり必ずしも彼の意欲のすべての方向を満たすものではなかつた。しかし、自己の無名性をも顧みずさうして手強い論敵を屠らなければ、知的世界に地歩を得ることは覚束なかつた。(1)——加ふるに、内外いづれの方向を意欲するにせよ、自己の思想的独立性に對する過敏なまでの確信があつた。(2)——

しかし、他者に対して論評をいかに主体的に遂行しようとも、自分自身、思想体系をいまだ客観的に作品として公表してゐない以上、さういふ自立性の意識は、なまじ強烈であるだけに却つて実際には、「自分はいつだつてどんな思想よりもずつと聡明なのだ」と自惚れることから、どれほども隔たりえないであらう、たとへ他方で真理追求への熱意をいかに声高に申し立てるにせよ。——従つて、さうしたひとりよがり、に陥らないためには、つまり、いかなる内容の思想をも直ぐに無味乾燥な自我と取替へるやうな自己満足に墮さぬためには、論評は、それもヘーゲルの現在の立場に可能な限りでの論評は、どういふものであるべきだらうか。——おそらくは、非哲学のかかる誅伐そのものが、実はすでに構築の起始であり一端であり、おのが体系全体と必然的、聯関をなしてゐる、やうな場合に限り、それ故、体系が本質的に問答法的である場合にのみ、それは独善独尊への転落を免れうるのではないだらうか。——

そして、彼の論評活動が事実さういふものであつたことは、若干のテキストの外面的構成や、あるひは論評活動そのものの動静からすでに窺ひうる所なのである。たとへば、『差異性』においては、哲学の理念の提示と非哲学の破壊と同じ論文の中で同時に遂行されてゐるのであるが、それは、彼がその文筆活動の発端において早くも、論評と構築とを同じ文脈のなかに結合して考へてゐたことへの何よりの証左ではないだらうか。しかし、この兩者の必然的聯関を更にいつそう直観的に提示してゐるのは、『哲学評論』へのヘーゲルの寄稿内容が、第二巻第一号（『信と知』の一篇のみを掲載したこの号は、一八〇二年七月下旬に刊行された）を境として、非哲学の論評から一種の体系的叙述に転じた、といふ事態である。といふのは、第二巻の第二号および第三号は、それぞれ全頁および約三分の二の頁数を用ひ、『自然法の学的な取扱ひかたについて』(Werke IV: S. 417~485)を連載してゐるが、この論文の基調は、ある特定の主題（自然法）をみづからも積極的に論究することにあるのであつて、もはや非哲学の膺懲といふ否定性にとどまるものではない、しかも、その前号の『信と知』において、論評は遂に、論評さるべき形態のすべてに及ぶことによつて、論評としては完結してゐるからである。従つて、この事態は、論評はその働らき（即ち否定）を

徹底することによつて、おのづから（つまり必然的に）構築の端緒に転ずる、といふことを示唆するものではないだらうか。

——かくの如き必然性が、ヘーゲルにおける論評と構築とのあひだである、即ち両者の対自態であり、体系における双方の具体的配置である。それは又、彼とシュリングとの差異性でもある、換言すれば、事態に対する・彼に、特有な関わり方であり理解態度である、つまり、時代の状況や共同の旧友にさへ制約されないところの、そして心的聯関の起伏や方向を規定して仕事にまで表現させるところの、彼自身の主体性である。それ故、根底を全く異にするにも拘らず、シュリングと同じく彼の場合にもやはり、論評するだけの時期は過ぎ構築の秋が来ねばならなかつたのである。しかし又、その時が熟するまで彼を論評に熱中せしめたのも、まさに同じこの主体的根源だつたのである。——

われわれはここで、つひに、ヘーゲルが時代の状況や社会的对人的關係などにもはや煩はされることなく、彼に特有の仕方で（主体的に）自分の意欲を限定しつつある場所に辿り着いたかのやうに思はれる。もしさうだとしたら、今こそわれわれは安んじて、彼のさういふ活動のその思想的根柢を自体的に、問ひはじめることが出来るであらう、即ち、理念的聯関の対自化に着手してももう差支へないであらう。

三 論評の理念と完成

三——かくして、われわれが今ここに及がき出したヘーゲルの像は、勿論いまだ素描の域を出ないけれども、もはや死トイッシュマッセの面のごとく無表情でも無感覺でもない、それは寧ろ、幾筋もの生聯関がそこから発出し又そこに帰趨するところの、いはば生の統一レイレブンスアインハイトに他ならない。即ち、それはまづ、内的構築を暫時控制してまでも知的世界へ逆り出ようとする外向的意欲のその主体である、しかも第二に、時代の状況や人間關係の渦のただ中にありながら、その論

評活動を実存的企投にまで変様させてあるやうな独立不羈の主体である、そしてそれを通じて更に、実は、自分自身の体系をおのづと勧請しつつある精神的個性でもある。——従つて、彼自身⁽³⁰⁾が居るこの場所⁽³⁰⁾でこそ、論評一般に対する彼の把握をそれ自体として(理念的に)問ひうるし、また問はねばならないであらう、彼の論評活動の理念的意味を理解するためには。——以下、まづ、彼自身の論評理解を、『哲学評論』第二巻第一号のころまでの、特に論評的な論評の時期(就中、『差異性』『論評の本質』『常識と哲学』⁽³⁰⁾)および『懐疑論と哲学』⁽³⁰⁾、更には『信と知』⁽³⁰⁾などを基礎として、対自化してみよう、しかも彼自身におけるこの思想聯関こそ、彼にシ、エリ、グとの同伴連袂を決意させた当の根拠でもあるに相違ないのである。

三—二「哲学の理念」(1) 理性は絶対者の現象⁽³⁰⁾であり、それ故、当然のことながら、絶対者と同様、永遠に自己同一的である。自分のさういふ本質を認識するまでにいたつたとき、理性は眞の哲学を産出する。しかるに、理性がそのやうにただひとつの理性でしかありえない、とすれば、生み出された哲学のその本質も端的にひとつであり、且つ断言⁽³⁰⁾的でなければならぬ。つまり、かういふ眞なる哲学のその課題もその解決も、本質的にはどんな時代においてもひとつであり同一なのである。従つて、その内的本質に関しては、哲学には、進んでるとか遅れてゐるとか、あるひは次第に改良されてゆく、とかいつたことはありえない。いかなる哲学も、眞の哲学である限り、芸術作品のやうに全体性(理念)を内に含み、自分の中で完結してゐるのである。哲学史は、だから永遠に一なる理性の歴史である。——それ故、ヘーゲルのこのやうな理念的提示に従へば、眞なる哲学は、常に *philosophia perennis* ⁽³¹⁾としてのみ可能であり、定説⁽³⁰⁾的な展開をしか許さぬものとなるであらう。——

(2) これに対し、觀念論⁽³⁰⁾の敵役⁽³⁰⁾に仕立てられたラインホルトのほうは、いはば歴史的相対主義の立場に立つのである。このイエーナ大学元教授は、ある哲学の、その哲学にしかない特有の (*eigentümlich*) 見解といふものにひどくかかづらひ、過去の思想のさういふ特有性をひたすら歴史的に学習することが、眞の哲学に到達するための豫行演習

になる、といふ。つまり、どのやうな哲学をもみな、その特有性のままに捻くり回してしかも自分の立場への豫行演習に変へてしまはう、といふ態度が彼の特有性をなす。しかしこの意図を実現するにあつて、ラインホルトはおのづと相對主義の立場を逸脱してしまつた、といふのは、彼は、そのために哲学を論理学に（即ち認識作用の形式への問ひに）変換したのであるが、同時にそれによつて、超越論哲学が起爆させた哲学革命を今度こそ決定的且つ最後のに終らせようと意図することになつたからである、もつとも、さういふ彼自身がこれまでに幾度となく（毎回別々のやり方で）哲学革命の終了を告示して来たのであるが。――

しかるに、そのやうに、認識の基礎を見いだし・これを究めるのだと称して、分析とか方法化とか陳述などの（つまり、「何となれば」「さうなると」「その点においては」「どの程度まで」等々の）、その雑踏の中を徘徊するといふこと――それが彼の実際なのである――は、それは実は、前述の歴史的固有性の学習と同様、哲学の本堂へ赴くまへに外陣（Vorfeld）で徒らに瑣事にかまけてゐること、いや寧ろ、哲学に先立つて哲学を行はうとすること、にほかならぬ。換言すれば、ラインホルトは、いつまでも助走ばかりしてゐて、哲学そのものへあへて跳びこむだけの度胸を缺いてゐる、ないしは、哲学そのものを実現する能力がないことを自分でも告白しながら、かへつてその中に慰めを見だしてゐるのである。従つて彼においては、豫行演習一般が、とどのつまりは、認識を小心翼翼として基礎づける形式論が、哲学にとつて代つてしまつたのである。――さうなるがらゐなら、あるひは、カント、そしてブーテルヴェークのごとく、懷疑論者に乗せられないために、哲学にあらざる（*das provisoriale Philosophieren*）を継ぎ合はせ接ぎ合はせるがらゐなら、寧ろ、稀有の頭脳が生み出した体系を祖述するほうを、もしくは、懷疑論者のごときには目もくれないで、盲目的であらうとも一貫し徹底した教説的哲学に味方するほうを、選択すべきであらう。⁽¹⁰⁾
 (Werke IV.; S. 96)――といふのも、これら仮哲学・形式論哲学は、真理を愛し独断論を恐れるのだと言ひながら、実は真理を恐れ真理そのものへの関与を避けてゐるのだから、である。そしてその根底には、時代の運命たる対象論

理が——本来たがひに異縁な・主観対自と客観対自とを、ただ外から形式的に結合するだけの無関心な立場 (Gleichgültigkeit) 即ち反省 (Reflexion) が——潜んでゐるのである。

(3) しかし、眞の哲学は、真理に向つて挺身し肉薄することを、主観がみづから生き生きと真理に与かることを、要求する。しかもそのためには、更に、それにしか見いだされぬといふやうな特有なもの固有なものを、すべて抹殺し断滅することが要求される。さういふ意味で、哲学に到達するには、捨身になつて突入してゆく (sich a corps perdu hineinsetzen) —— corps (身体) は特有性の総和と考へられるからである —— ことが、換言すれば、自分の偶然性や個別的制約から自由になり絶対者の思弁に没入しきることが、即且対自的に必要なのである。

まさに其所から、哲学はその必当然の真理を説き起さねばならない。それは、絶対者 (即ち主観と客観との絶対的同一性) をば、超越論的直観と反省とを統一する思弁知の立場において、意識に対し構成するところの、思弁哲学としてのみ可能である、即ち、哲学の課題は、分裂とは即ち絶対者の現出であることを絶対者の中で、有限とは即ち無限と同じく生であることを無限者の中で、現実に確定してゆくことなのであり、さういふ内容においては常に同一なのである。

(4) しかるに、まさにこの思弁性の故にこそ、哲学は、対立および制限を究極のものと見做す悟性の立場に、更に常識の立場に対立せざるをえない。いな、寧ろそれらに対立することによつてのみ、哲学は哲学でありうる、従つて、哲学が開示する世界は、常識との関係においては即且対自的に顛倒した世界なのである。——してみると、哲学はその本性上、秘教的 (esoterisch) であり、それ自身においては決して俗衆向けになりえない、また啓蒙のやうに、俗衆のために何かを調合したり調製したりすることも出来ない、それはさうしてまで自分の品性を卑めてはならないのである。それ故、最も眞正な哲学はポピュラーになるやうなものではない。たとへ眞正な哲学であつて一般化したやうなものがある、としても、その一般化してゐる面は実は非哲学的な側面なのである、その哲学の中に眞に哲学的な

ものを見出すためには、非一般性の面をこそ探索しなければならない。実に非一般性こそ、真正の哲学に帰属すべき賓辭であり、また、ある哲学を推奨しうるかいなかの根本基準なのである。――

まさに以上のごとき本質諸規定(1)~(4)こそ、統一されて理念にまで結晶し、この時期のヘーゲルに、「哲学」として理解されてゐた所のものなのである。換言すれば、論評活動を遂行するうへで彼の思想的根柢となつた理念聯関である。――それでは、このやうな理念聯関においては、論評の本質は、どのやうに規定されるであらうか、論評は理念的にはいかなる活動であるべきであらうか。

三―三 「論評の本質」すべて、論評するといふことは、それ故、哲学のこのやうな理念に訴へること、そしてそのもとに包摂すること、である。従つて、哲学的論評は、(1) 理念を缺くものに対しては、拒否するのみである、換言すれば、それは、理念に仕へるものと理念を缺くものとのあひだのいかなる肯定的關係をも完全に粉碎する。――論評は、非哲学に対しては異質異縁な法廷として臨み、そのものに、君は他の何ものでありえようとも哲学であることとは出来ないのだ、と一方的に宣告し、かくしてかれ、非哲学におのが空しさを告白させるだけである。

(2) しかし、理念が多少とも、その中に認識されるやうな、さういふ思想に対しては、論評は、いかなる態度をとるべきであらうか。――(i) 真なる哲学においては、藝術作品の場合のやうに、理念とそれの客観的展示(Darstellung)とが合致してゐるけれども、それは、この思想が自由な個人によつて個性的に表現されることを妨げはしない、従つて理性は当該思想の個性的表出の中に、自分と同じ・生きた理念の本質を直観し、これを享受するのみである。理性が理性自身を、理念が理念自身を認識する場合、本来の意味での論評關係は成立しないであらう。――(ii) また、理念がその中に現前してゐるにしても、学的体系といふ客観性に到達してゐないどころか、ただ素朴に片言隻句を以て表出されてゐるにすぎない場合には、さういふ思想は、思惟によつて広くなり又深くなることを斥ける・あの美魂のいはば複製であつて、美魂と同様空虚である、従つて学的に論評するほどの意味はそれには無い。――(iii) そ

れ故、哲学的論評が、(1)のやうに単に断罪的に臨むのではなく、積極的に立向つて理念の現出の仕方や程度や範圍を明確にしなければならぬのは、理念の具体的展開のなかに、自由な個性には非ざる・主観性や制限性が混入して来て理念の輝きを曇らせてゐるやうな思想の場合である。これを少しく敷衍してみよう。――

この場合(2)の(曲)にも、しかし、論評は結局、その対象に否定的に対立することになるであらう、理念の現実のエネルギーは、有限な主観性・制限性が並立することを許す筈もないからである。(a) 論評は先づ、理念を曇らせてゐるものを払拭しなければならぬ、ないしは、理念自体の内発的な力がその最高の形相にまで突き進んでゆかうとしてゐるのに、これにあくまで日の目を見させまいとする殻を、打ち割り打ち砕かねばならぬ。(b) さらに、有限性への逃避ないし執着――理念を明確に認識してゐるにも拘らず、その敵しさを避け、個別的な主観性を何とか失ふまいとする・理念への弱々しさ――に対しては、有限性へのその言ひ逃れをあばきたてねばならぬ。(c) しかし、論評がいま現実の問題として、特に密着すべきは、通俗哲学の流儀である。これは、たしかに偉大な理念的体系と同じ言葉を口にしてゐるのだが、実は中身の空虚な多弁に過ぎぬ。にも拘らず、それは空虚であるだけに却つて、みんなに分り易いといふ利点を持つ。のみならず、蕊のない莢がこんなにも沢山あるとは誰も信じにくいので、それはポピュラーになるにつれ、權威にさへも成る。「啓蒙」はその一例である。――論評は、哲学の敵愾さが平板さに変じないやう、多弁の雲霧を一掃しなくてはならぬのである。

それ故、以上のやうな分析を総合すると、論評は、その主要対象に対しても、つまり、理念と主観性又は制限性との混淆形態に対しても、ふたたび(1)の場合と同様)、否定的に対立することになるであらう。といふのは、ここで論評は、自分自身(即ち理念)をば尺度として、対象の中の理念的要素(いはば隠れた自己(Crypto-Ego))は評価し肯定し、被制限的要素はこれを拒否し貶斥するが、しかもこの両要素の混淆ないし合成こそ、この対象思想の特有性・ユニークさをなすものであつて、従つて、論評の徹底は、たしかにその対象をその唯一の個性から外へ引きだ

すことであり、この合成体を分解することであり、かくしてそのものに死を齎すことになるであらうからである。——ヘーゲルの論評活動が事実さういふ否定的、本質的のものであつたことを、ここで、『信と知』におけるカント哲学への論評を一例として、実証して見よう。

(3) ヘーゲルが見る所では、カントの中にも思弁的理念が屢々出現してはゐる。特に生き生きと現はれてゐる箇所のひとつは、統覚の根源的綜合的統一を、産出的構想力（即ち差異性）の原理であると同時に悟性（即ち統一）の原理であると論じ、かくして直観と悟性との原理的同一性を提出した箇所である。たしかに、カントは其所で、絶対的に根源的に綜合的な同一性たる真の自我^{イッヒ}を、すべての表象にただ伴ふだけの自我とか主観といった抽象物から、つまり多様に対立する・悟性的な純粹自己同一性から、區別してはゐる。従つて、カントは超越論的見地から、そこを更に一步押し進めて、構想力を直観的悟性である、と解釈すべきであつたらうのに——。しかし彼は、自分の思维的經驗のうち、理性の理念と理性の現象たる認識能力とのふたつを見出したとき、（彼の本性がさうさせたのだが）直観的自発性を選ばないで現象の方へ踏み切つてしまつた、つまり、真にアプリアリなものとは純粹な悟性的同一性の方である⁽³³⁾と見做した、その結果、認識は、石を温める太陽のごとく、形式的主観的且つ外面的同一性をしか実現できぬことになる。これでは、折角の思弁から、反省の立場に逆戻りすることになりはしないであらうか——

しかるに、ヘーゲルにとつてはまさに遺憾の念を禁じえなかつた所であり、決して欲しくなかつた所のこの思想的決定こそ、まさに、カント、自身の決定であり、カントならではの選択であり、即ち彼の特色・彼の個性をなすものなのである。逆に、ヘーゲルの論評が示唆する方向に決定することは、カント哲学にとつては、まがふかたなき精神的自殺なのである。

——この一例が明示してゐるやうに、ヘーゲルにとつて、哲学的論評とは、本来その対象をそれ自体として否定的論争であつたのであり、非理念的なものをただ断罪するための法廷であつたのである。理念の純粹な自己同一

性に基づくが故に、この立場を実体的理念の立場、より適切には理念的、実体の立場と規定しても差支へないであらう。

三—四 「論評の徹底と深化」 (1) 上述のやうな基本姿勢のもとに、ヘーゲルが彼の法廷に召喚した対象は、主题的に名指したものでなくても、大よそ、著書および雑誌に十数、思想家に十二名を数へる。⁽³⁴⁾——しかし言ふまでもなく、ヘーゲルは彼の論評の尺度をそれらに対して、千篇一律に、ただ反復適用したのではなかつた。——現実の渦のただ中であへて身を投じたヘーゲルのその論評ぶりは、たしかに最初暫くのあひだ、人触るれば即ち斬り、馬触るれば即ち斬る、の勢ひであつた、無名の文筆家であらうと大家であらうと、何の手心も手加減も加へることがなかつた、哲学の本質に關しては、「先輩も後輩もない」からである。とりわけ、非哲学ないし通俗哲学・流行哲学——その多くは折衷主義にすぎないのだが——に対しては、その饒舌を思ひきり打ちのめし懲らしめて、とどまる所を知らない。

(2) にも拘らず、彼はまた他方では、それとは著しく異質な思惟關係、即ちそれら非理念的な知識形態が現象してくる必然性をも、その論評活動の最初から承認してゐるのである。況んや、理念不在の空虚な殻^{から}ではなく、理念が制約されつつもすでに実質として進入して來てゐるやうな思想については、尚更であつた。即ち、彼には、論評の対象と論評をする自分の立場とを、時代の精神的背景と文化的聯関の広がりとからいはば立体的に把握する視点が、理念的実体の立場とは別に、もうすでに取得されてゐた。従つて、非理念的な思想といへども、決して単に偶発した仮象なのではなく、現はれるべくして現はれて來た・時代の子であり歴史の必然的所産なのである、つまり、それらは「窮乏^{ニッダ}」の時代から生まれて「反省」(Reflexion)の文化に帰属する現象と見做されねばならないのである。(Werke⁽¹¹⁾ IV; S. 12 ff.)——

それ故、理念を尺度として、ある思想がこの尺度に一致するか否かを吟味する、といふ態度は、それが右のやうな

視点に結びついて多くの思想のうへに拡大され適用される場合、実際には、この反省の世界の構造を説明してゆく方法に転化せざるをえないであらう、理念に一致しない多くの思想がまさに一致しない限りにおいて逐一反駁されてゆき、かくしてそれらが理念に一致しない共通の根拠がおのづと発見されるであらうからである。そして、論評が次第に進展してつひに非理念的思想の主要なるものを悉く尽くすにいたるならば、つまり反省の現象の全範囲におよんだ場合には、その時こそ、理念の純粋な活動を阻んでゐたものが、その根源から、しかも最も普遍的な本質において顕現してくるであらう。従つて、論評としては、非理念的思想がそこからたえず生み出されてくる源泉を、ここで一挙に覆滅する機会に回りあふことになるが、もしさういふ廃棄に即且対目的に成功するならば、それは又、論評の完成となり完結となるであらう、論評はそこでは、これまでそのつど經驗的に遭遇してきたいぢいぢの非理念的思想に最原煩はされることがなくなるからである、いかなる非哲学や半哲学が今後現はれようとも、それへの対応はすでに原理的に完了してゐるからである。——しかも、事実、ヘーゲルの論評活動は、決して単に無目的な遊びではなく、そのやうな目標点に向つて内在的必然的に駆り立てられていつてゐるのである。彼の活動のさういふ必然的進行が——それは、だから最早当初の頃のやうに出会ひがしらの抜打ちではなく、目的秩序によつて導かれてゐる——反省世界のどのやうな構造と実質とを開示するにいたつたか、まづそれを、彼みづからが概括した『信と知』を基礎に略述してみよう、ここに内蔵されてゐる爾他の重要問題を暫時後回しにしても。

(3) 当代の文化の根底にあるのは、主観性 (Subjektivität) といふ・世界精神がヨーロッパの北部に樹立した強力な原理である。——宗教においては、それはプロテスタンティズムの原理として作用してゐる。作品や儀礼において神聖なものを見つゝを直観することは、その信仰がみづから拒否する所である。信仰は、悟性によつて、即ち、神像において石や木や金といつた素材をしか見ず・聖餅においてただパン粉をしか認めない啓蒙によつて、神聖なものが客体化され有限化されることを危惧し、それ故、ただ個人の心胸の中に逃避してそこに神殿を建て、この主観性の中へ閉ぢこも

らうとしたのである。しかし、そのやうに主観性の中に純粹に固持されることによつて、宗教は、永遠なる美と淨福とへの憧憬となり、あるひは、さういふ憧憬に満たされた愛の感情・愛の感覺となる、しかも、いつまでも憧憬にとどまり・感じ (Empfindung) にとどまるはかはない、客体的なものの規定されたものに関係することが許されないからである。そして、純粹主観性の外にはじき出されたものの總体を支配する威力こそ悟性なのである。――

しかるに、この悟性はまた悟性で、主観と客観とを峻敵に区別し、対立させ、且つこの対立に固執する。従つて、純粹主観性 (宗教) と悟性とは双方ともに、この分裂を、態度に関しても領域に関しても、進んで固定し、分裂のまま (つまり、めいめい己が住処にゐて互ひには争はず) 調停に到らしめようとする。かうして發生した・分裂の文化にとつて、このやうな無関心的 (インデフェレンツ) な対峙 (調停) を諸なはず・深刻な対立そのものの中からもう一度和解を生み出さうとする精神的、生のその努力は、無縁且つ無意味のものとなつた。それで悟性は、理念には無記 (インディフェレント) のまま、經驗界即ち有限者の領域にひたすら没入するやうになる。

――しかしながら悟性は、經驗的多様がただ果しなく終りなく展開してゆくなかにあつて、それにも憚らず、有限に対立する無限といふ概念を、みづから定立し固定しようとする。つまり、悟性は先ほど自分の外部で、宗教あるひは純粹主観性とのあひだに絶對的対立の關係を固定したのであつたが、この対立をこんどは自分の内部で、有限と無限との固定的対立として反復し二重化するのである。かくして、己が内と外とにみづから固定した二重の対立のあひだを、蝙蝠のごとく行きつ戻りつ転々とする反省の立場、即ち理性を装ひつつ実は有限を固持しようとする立場、これこそ、近世的思惟にとつて運命となつたのである。

――ところで、絶對者への到達を理性に諦めさせようと企てるのであるから、この思惟が究極的に辿り着く所は哲學そのものの死でなければならない。そして幸福説や啓蒙思想に次いで現在登場しつつある所の、カント、ヤコービ、フィヒテらの哲學も、彼らの意識してゐる方向がどのやうにそれら先行思想に背馳してゐるにせよ、みな一様に反省

の文化のさういふ所産と銘打たねばならない、それといふのも、彼らの哲学はいづれも、有限性の実在主義レアルイズムと概括できるやうな構造を提示してゐるからである。即ち、幸福説や啓蒙思想はすべて、(i) 有限な存在、經驗的個別的に実在するもの、これこそ絶対的である、(ii) 有限とこの有限に対立する概念的無限とは、絶対的に対立する、(iii) 従つて、有限と無限との統一といふ理想は、彼岸的なものでしかない、つまり対立する当のものには無関係に、反省が単に両者の外側から定立した概念でしかない、などと主張するやうな構造になつてゐるが (Wolke IV, S. 320)⁽¹¹⁾、やういふ根本綱領テーゼをそれぞれ特有の仕方に変様しながら、高度の綜合にまで到達させてゐるのが、前掲の三哲学だからである。もちろん、三者は、これらを互ひに共通な原理としながらも、カントはその客観的側面、ヤコービはその主観的側面、そしてフイヒテは両側面の綜合、といふやうに原理の実現の仕方を異にしてはゐる、しかし又、三者は相集まつて反省といふ全体的原理を完成し、同時にその契機ともなり可能的形態ともなつてゐるのである。

——しかるに、このやうに、諸側面がそれぞれ規定的な(判然とした)姿で、しかも体系的に出揃つた以上、今や全体そのものも即且對目的に現前しなければならなくなるであらう、つまり、この三哲学において、反省の原理のみならず、反省の文化も亦完成しなくてはならない、つまり最終最高且つ最具体的な・反省の形態がそこに現象してをらねばならないのである。そしてそこまで反省の世界が開示され尽くしたとき、この解明の担ひ手であつた論評も亦最終最高の段階に達するであらう、従つて其所で、いままで理念的実体の立場で遂行されてきた論評そのものが、その実存エンシェンツを問はれねばならなくなるであらう。——

三一五 それ故、論評はいまや、最終の・そして最高の活動可能性の前に立つのである、といふのは、その本来的対象たる反省的諸哲学が、ここでひとつの世界を形成して、しかも非理念性といふ・否定さるべき本質において、展示されてゐるからである、つまり、それらは、根源から具体的形態の尖端にいたるまで反省といふ原理に貫かれた現象として把握されたからである。従つて、論評は、ただ最後の審決をくだして、非理念的なものの世界自体に止め

を刺せばそれでよい。さうすれば、非哲学の断罪といふ課題は一挙に果されるであらう。非哲学者どもがひそかに掘開して哲学から種々汲みあげてゐた溝渠は、その源から断たれ^{とど}められ、非哲学は生き永らへるすべを失ふであらう、蔓つてゐた三号雑誌を^{せんじや}芟鋤するごときは何の難作もないことにならう。(vgl. Werke IV, S. 503-504) ⁽¹¹¹⁾しかし、それではこの最終最高の可能性を現実化し、論評を終結させると同時に構築へ転換させる最後の一步とは、どういふものであらうか。真の哲学に^{ポイアゼン}地所と^{グルント}土台とが備はり始めるきつかけとしての、非哲学への最後の⁽¹¹²⁾一撃——なにが、いつたいさういふものになり得るであらうか。

この問いを解答可能な問いにまで仕上げるために、一、二の準備的問題をまづ論じ、解釈の今後を限定しておく。

(1) そのやうな最後の一步を現実^に、歩んだとき、論評は、論評そのもの(理念的^{法廷})としては、どうなるのか。——たしかに論評さるべきものはこのとき、消失するほかないであらう、その非^非理性性が即且対^自的に^抉りだされた以上、それには最早、全き空虚、純粋な否定性、つまり無^{より}ほかに何も残りやうがないからである。従つて、論評する活動のほうも、積極の対象を缺^が故に、空転するか、停止して単なる可能態に転ずるかいづれかであらう。しかし、それは無に帰したのではなく、自己自身に、即ち理念そのものに直接に一致する働きとなるのである、といふのは、論評する主体は、自分自身を尺度として、対象がどこまで自分に一致するかを吟味する理念そのものだからである。そして、理念がこのやうに非^非理念的なものに最早構ふことなく、純粋に自分自身に働きかけるときに、体系が構築されるのである。それ故、問題は、この構築において論評がどこまで、従つて理念の自己関係の運動において非^非理念的なものがどこまで、対^自的契機でありうるか、といふことであらう。——

しかるに、この最後の一步は、それが理念的^実体の立場で遂行されるかぎり、非^非理念的なもの^の非^非性、つまり非^非自^体性・非^非対^自性を定立しはしても、本質的にただそれだけにとどまり、それ以上に出ない。もちろんそれは、その同

じ一步によつて同時に、理念の純粹自己關係性を直接に定立し、それによつて、両者が自己自身に——理念は理念に、非理念的なものとは非理念的なものに——直接に等しくなる、といふ關係を開示するけれども、しかし、理念がこの非理念的なものを否定することによつてはじめて、理念自身に等しくなる、といふやうな事態までは決して開示してゐない、開示されてゐる事態は、反省的ではあるが決して媒介的ではない。

してみると、論評、即ち非理念的なものに否定的に關する可能性は、理念にとつては、あるひは理念が理念自身に關係する可能性（構築）にとつては、無関心的ないし偶然的な可能性であることにならう。しかし論評と構築とのあひだのさういふ非必然的で偶発的な關係は、実はむしろシェリングの配置する所ではなかつたらうか。（二一四の(6)を参照）ヘーゲルにおいては、論評活動は、現実の状況からして既に、熱情的な実存的企投とならねばならなかつたし、思想的内的聯関においても、論評は体系の構築にとつて必然的契機でなければならなかつた、即ち、非理念的なものとの非性を定立する働きは理念の展開の内へ止揚されねばならなかつた、そのことを、彼の活動の實際が示唆してゐた。（二一五の(3)を参照）

それ故、理念が反省の世界をその全き否定性において定立し尽くす瞬間を、ヘーゲルが思弁的聖金曜日（der spekulative Karfreitag）と稱びはしても（Werke IV, S. 414）⁽¹⁴⁾最後の審判に譬へてゐないことは十分注意されてよい。

——「数々の書展かれ、他にまた一つの書ありて展かる、即ち生命の書なり、死人は此等の書に記されたる所の、その行為に随ひて審かれたり。……すべて生命の書に記されぬ者は、みな火の池に投げ入れられたり。」（ヨハネ黙示録、二〇・二二―二五）といふこの表象のほうに、理念的実体の立場は（その法廷的構造のうへからいつても）はるかに聯合しやすかつたであらうのに、彼の思惟は、寧ろ反対の方向に向つてゐるからである。従つて理念が自分自身を尺度として最後に到達したのは、たしかに、どこにも神はゐない、神は死んだ、といふ果て知れない苦惱の世界ではある。しかし、神がゐないといふこの酷いありさま、そして一切は無に帰するといふこの虚無的深淵は、実は最高の理念の

契機であつて、その中から最高の總体性トータルキートが生き生きとした形態になつて 甦よみがへつてくるやうな可能性なのである。そして、さういふ可能性を把握する純粹概念の立場こそ、却つてかの非理念的なもの（反省的否定性）にも実有エッセンスを与へる哲学なのであり、ヘーゲル自身がまさにこの時点で意図する所なのであつた。（*Werke* IV, S. 413~414）⁽¹⁵⁾ それ故、われわれはここでたしかに、精神の生（*das Leben des Geistes*）の立場を、即ち「死を恐れ懼り、決してそれに害はれまいと只管わが身を守るのではなく、死に耐へ、死のうちに自分を維持する」生レベを、あるひは「絶対的な分裂のまつただなかにあつて自分自身を見つげ出す」精神ガイストを（*Werke* IX, S. 27）⁽¹⁶⁾ 早くも豫感することが許されるであらう。——にも拘らず、『精神の現象学』との思想的聯関を論ずるに先んじて、なほ、一、二の問題を熟考しておかねばならない、一義的な聯関をたやすくは樹立させないやうな問題状況が、いま一方で生じてゐるからである。

(2) 上述のやうに、最後の審判といふ表象——ここでは、永遠の生命に入るものと永遠の滅亡はろひに入るものとが 生命ちがひの書かみといふ尺度に従つて、永劫に且つ絶対的に選別される——と、聖金曜日（即ち、死人の復活よみがへりに先立つ・苦痛に満たされた虚無）の觀念とは、滅亡又は虚無、つまり否定性概念のその理解に関する限り、別個の思惟聯関に属するものと見做されねばならないが、さうだとすると、そのやうな區別は、そこからの類比を通じて、論評クリティークそのものに対するヘーゲル自身の理解のうちに、ふたつの・相互に、独立な思惟聯関が並立してゐたことを推定させるものではないだらうか。——

既に縷述して来たやうに、ヘーゲルにおいて、論評とは、それが哲学の理念に基礎づけられてゐる限りにおいて、非理念的なものを裁く異縁の法廷を意味してゐた。そしてこの理念的実体の立場は、理念の純粹自己關係性と非理念的なものとの絶対的否定性とを同時に直接に定立することによつて、自己を完成した。しかるに、このやうに非哲学の非理念性を吟味し摘発してゆく思惟聯関とは別に、しかもそれと同様に、最初から、もうひとつ別の思惟聯関が並立してゐたのであつて、これは、非理念的なものが現象してくる必然性を反省の世界のなかで展示してゆく立場である、

しかもそれが最後に行きあたる全き否定性は、その中から最高の理念的總体性が蘇ってくる可能性である。(この聯関を差当つて精神的生の立場と名付けておかう。)そして、このふたつの思惟聯関がひとつの論理にまで整合的に統合されてゐるかどうかは、われわれが今から批判的に吟味すべき事柄なのである。(この兩聯関はそのまま最初から論理的諧調をなす、といふやうな主張は、自明的でないどころか、検証によつて逐次反駁されるであらう。)——さて、理念的実体の立場はそれだけで完結してゐて、精神的生の立場によつて特に補充される必要はない、それは、非理念的なものを否定する論理として、それだけで整合的であり自足的である。しかるに精神的生のほうは、たしかに理念的実体の立場をその契機となすべきではあらうが、しかし論評活動のこの時期にヘーゲルが実際に論述した所は、精神的生のさういふ構造をただ原理的形式的に提示するか、あるひは、その豫感を一方的熱狂的に吐露するか、いづれにせよ、理念を主張するだけの、独断論ないし抽象論の域を出てゐなかつた。(彼は、体系的作品を未だ一篇も発表できてゐなかつたのである。)そして、さういふ抽象的な主張や示唆が、理念的実体の立場など異なる思惟聯関と混淆し交錯してゐるために、彼の論述自体が、全体として晦渋な、文脈の著るしく辿りにくいものになつてゐる。つまり、精神的生に対する・彼のこの時期の理解が抑々、そのやうに、他の思惟聯関と互ひに夾雑物となり互ひにその理解を妨げあふ程度の抽象性にしか達してゐなかつたのである。従つて、兩思惟聯関のあひだは、さういふものとして、未整合のままに、混雜してゐる通りに、考察すべきなのである——眼前の解の實を亭亭たる大樹と直接に同一視しないだけの覺めた眼差^{まなざ}しで。

——ここで、端的に結論しよう。この時期のヘーゲルは、非哲学の論評、といふ課題を、ふたつのそれぞれ別個の思惟聯関を以て理解してゐた。しかし、たしかに、どちらも対自的には明確な規定と構造とを持つてゐるが、相互的には、自分の自足的完結性の故に他の聯関に対して無関心であるか、あるひは、他の聯関に原理的には関はつてゐるけれども、ただ形式的抽象的に関はつてゐるだけか、そのいづれかにとどまつてゐた。従つて、ヘーゲルは実際には、

両思惟聯関のそのあひだ、がこのやうに無関心的ないし反省的な配置になつたままで、それ故、その間に未だ内面的統一を樹立しえてゐないままに、論評活動に自分を賭けていつたのであつた、つまり、彼は同一の主題に対して、まだ十分熟れきつておらず秩序も立つてゐない根拠から、即ち双数のままの思惟聯関から、しかし実存的情熱的に、骨身を削つていつたのである。——理念的実体の立場と精神的生の立場とのあひだは、このやうに、彼における精神的生の歴史から解釈さるべき事態であつて、「弁証法的に止揚して」処理しうるやうなものではないのである。

(3) 論評が理念の実体の立場で遂行されたとき、それと構築とのあひだは、たしかにシェリングにおけるそれと同じ配置になる。しかも、論評の立場を最も体系的に叙述した論文『論評の本質』については、以前から、執筆者は誰なのかといふ *Autorschaft* の問題が存し、そしてシェリング自身が「……しかし、この論文の多くの箇所や根本の思想は私のものである。私が少くとも校閲してゐないところはその中にないであらう」と語つた所から、それらに基いて、この思惟聯関が本来ヘーゲルに固有のものではない、従つて、精神的生の立場とのあひだが十分こなれきつてゐないとしても、それは彼の思想的責任ではない、と論ずることは、形式的には可能であらう。しかし、文献学的究明がどこに落着くにしても（それに『論評の本質』については、ヘーゲルに少くともシェリングと同等以上の貢献を認めようとするのが現在の大勢である）、われわれの次の判断は渝らないし、又変へる必要もないであらう。即ち、自分の思想的独立性をあれほど強烈に確信してゐたヘーゲルが、編輯の責任をシェリングと分ちあつてゐる『哲学評論』の、しかも巻頭の序論について、それが署名なきまま発表されることを許容した以上、彼は、この『論評の本質』の思想内容が自分のものでもあることを承認したのである、従つて、かの理念的実体の立場はもちろん、それと精神的生の立場とのあひだの未整理・未消化の事態についても、安んじて彼の責任を問うてよいのだ——と、さう、われわれは論定することにしよう。

(4) それでは、このふたつの思惟聯関のそのあひだは、論評が徹底してゆくにつれて、特にそれがその最後の一步

を現実に進み終へるとき、どのやうに変貌するのであらうか、それとも兩者のあひだの無関心的ないし違和的な配置そのものには、終に變化がないのだらうか。——ヘーゲル自身の思惟がどのやうな方向を辿つたか、それは事實問題としては、論評期以後を展望するまでもなく、すでに明瞭である。即ち、反省的世界の非理性性が次々に露呈してゆくその極、無の深淵が現出する瞬間は、彼において、聖金曜日に譬へられてゐる、換言すれば、精神の生がその諸形態とともに、そこから又それを通じて復活してくるやうな契機として、それは理解されてゐるのである。従つて、理念的実体の立場がとにかく何らかの仕方、精神的生の聯関のなかへ止揚され、その契機として新たに配置され直してゐることは確實でなければならぬ、それは抽象的ないし独断的のしか言ひ表はされてゐないけれども。

(5) しかし、実体の立場のこのやうな止揚は、何も事實關係のほうから、つまり外堀から着手しなくとも、そしてヘーゲル自身の表現がどうであらうとも、論評について彼が抱懐してゐた理念聯関全体のその構造（ふたつの思惟聯関とそのあひだ）から、論理的必然性を以て直接に論じうることでないか——と、さう解釈する向きもあらう。論評の最後の一步とは、有限性の實在主義レアリスマスに止めを刺すことに他ならなかつたが、それによつて、理念と非理念との絶对的峻別も亦、（絶対と相對、無限と有限といった絶对的對置の、その一變様として）当然否定されねばならなくなるからである。つまり理念を尺度として非理念を吟味する立場も廃棄されねばならないことになる。——だが、さう解釈すると、ヘーゲルは、論評の理念を主張すると同時に、最初からそれを否定してゐた、といふことにならないであらうか。つまり、彼の自己撞着もここに極まれり、といふ事態が露呈してくるのではないだらうか。——

有限に對立するやうな絶対は、相對的絶対であつて、真に絶對的な絶対ではない——この定立テリセがヘーゲルのいふ理念のその核心にあつて、それはイエーナの最初期から一貫して主張されてゐる。「絶對者におけるひとつの形式を、つまり本質的に他の形式に對立したものを、絶對化してゐるのが現代の運命なのであるが、思弁が……この運命に屈服してゐはしないかどうか、哲学は問はねばならぬ」(Werke IV; S. 22)⁽¹⁷⁾、「かういふ固定した對立を止揚するのが、

理性のただひとつの関心事である」(Werke IV: S. 13)⁽¹⁷⁾等々。しかるに、ヘーゲルは、この根本準則によつて非哲学をはじめかの反省の三哲学を論評したにも拘らず、どうして更に徹底して、これと自分の理念的実体の立場とをつぎ合せ、どこまでも吟味して見なかつたのであらうか。即ち、絶対者の理念は、反省の立場が有限を救出しようとして定立した諸々の絶対的対立をば、決して残存させないのだ、といふのならば(vgl. Werke IV: S. 123~124)⁽¹⁹⁾かれは何故に、この尺度を、理念と非理念との峻別といふ・論評についての自分の概念にもあてがはなかつたのか。それとも、吟味する働き自体は、その尺度によつて、つまり自分自身によつて、吟味されなくてもよい聖域なのだらうか。——いや、それどころではない。法廷表象といへば、この時を去るわづか三、四年前⁽³⁸⁾、「人間の生活」⁽³⁹⁾から隔てられた環境で、孤独のうちに彼が書き綴つてゐたのは、他でもなく、罪、裁き、刑と宥しといつた主題についての・律法の立場と愛の立場との対置であり、わけても、無辜^{むこ}の義人がその運命と真に和ぎうるところまで後者を深めようとする思索ではなかつたらうか。それ故、論評は、断罪する法廷にそれが譬へられる限りにおいては、自分が曾て否定し拒絶した・律法の裁きに本質的に同形となる、といふそのことに、彼が気付きさへしたら(それは決して難しいことではないであらうのに)、彼はここで何も、既に廃棄^{はいし}すみの思惟形式に(今度は理念的実体の立場として変様されてゐるにせよ)もう一度かかはり合はなくとも、愛による和解の立場から精神的生の概念に直接進みえたのではないだらうか。彼がいまあらためて法廷表象を持ち出してくるのは、どんな必然性があつてのことなのか。——とどのつまり、幾らか論理主義的なこの解釈に従へば、ヘーゲルは自分自身に昏^{くら}かつた、ないしは、自分の知的活動の根底をなすものへの分析的吟味が缺けてゐた、その限り真に批判的な論評態度ではなかつた、といふことにならう、彼が自分自身の思惟聯関について、契機^{きげき}の配置の整合性をさへ吟味してゐたならば、彼は法廷表象によつて論評聯関を構成することの自己矛盾性を最初から洞察しえたか、あるひは、自分が既に拒否した概念との同形性^{トイプホルム}をそこに見いだすか、いづれにせよ最早それには煩はされしないで、精神的生の立場だけで、論評、さらには構築を一貫することが出

来たであらうから、である。――

(6) しかし、右のやうな解釈は、実は、理念的実体の立場が精神的生の聯関の中に既に止揚され終へたことを前提にしてゐる、そのうへで、この事実關係の諸契機について、(i) 有限性の實在主義レアリズムといふ概念は、理念と非理念との絶對的對置を含蓄してゐる、(ii) 従つて、前者が否定されるならば、「全体および皆無の原則」(Dictum de omni et nullo)に基いて、後者も亦否定される、と論じただけなのである。しかるに、われわれがいま何は差し置いても先づ問はねばならないのは、実体の立場を精神的生に止揚する動きそのものである。論評遂行の極、反省的世界が悉く虚無に化すると同時に、精神の生がよみがへつてくるこの轉換の真相が、否定(論評)が否定されて構築の契機に媒介される玄機が、問題なのである。精神的生の側からいへば、それは、みづから進路を開いてゆく大河のやうに、いま突破口を求めて、漲り溢れる瞬間に近づきつつある。その緊張の中に身をおく者に、この滔滔たる流れが最短距離のみを行つて蛇行せぬやう評論家風に配慮する暇ひまなど、あるであらうか。

三一六 それ故、最後の一步とともに、論評における理念的実体の立場も、即ち理念の自己同一性も、従つて論評を遂行する主体の自己性も、もはや維持されてゐない筈である、非理念を峻拒するやうな理念の自己同一性は、その抽象性の故に、反省の世界に帰属すべきものだからである。かくして、ここでは、尺度をたてて論評の対象を吟味し断罪するといふ立場そのものが廃棄されるのであるから、何か新しい尺度を考案するやうなことはもう問題にならない。定立された自己が尺度を揮ふ主体となつて吟味する、といふさういふ意味での能動性ではなく、寧ろさういふ類たぐひひの働きがすべて断たれた後にもなほ存立しうる如き能動性が問はねばならないのである。それは、全き非性のうちから精神の生としてよみがへつてくるすべてを、それが現出してくるままに、従つて勿論われわれの方から添へたり加へたり(Zutat)は一切しない、純粹に受容する働き、ひたすら静観する(aussehen)受動性、となるほかないのではないか。しかも精神の生は生である以上運動でなければならぬから、これを観ずる受動性も亦、精神の生と

もに深まりゆかねばならない、即ち、それは、遭遇し邂逅したものをただ単に熟視するにとどまらないで、それがかく現象せねばならぬ必然性を理解し、更にはさういふ必然性をその都度の現出形態から独立させて対自的に把握する境域にいたるまで、つまり精神自体の概念的開示に到達するまでは、働いてやまぬやうな、最も、いきの長い受動性でなければならぬ。

かくして、われわれは今や、彼の精神的生の歩みとともに、論評の域と時期とを越えて、その外へ展望を拡大し、この生を、それが溢出するままに、構築の方向に向つて追躡しなくてはならない。しかし、このやうに、論評自体が止揚されるといふ根本的な転換において、およそいかなるものが、特に理念的実体の立場を可能にした諸制約のうち、およそいかなる制約が、変貌しないまま無常の外に保たれえようか。精神の生の道程は決して平坦でも静穩でもありえないであらう。

四 論評から構築へ、実体から主体へ

四一 一八〇三年五月、『哲学評論』の第二巻第三号(通算して第六冊目)が刊行される——頁数は第二巻の第一号に比べれば三分の一、第二号に比べても七割にまで減り、編輯も体裁ももうひとつ心遣ひが行き届いてはゐなかつた。そして、このいはば瘦せ細つた号以後、『哲学評論』の刊行は跡絶えた——停刊の公告も挨拶もなしに。筆頭編輯者はヴェルツブルクへ去り、稍々遅れてこの年の秋、ヘーゲルの誠実な庇護者ニータンマー⁽⁴⁰⁾までも、同地に招聘されてイェーナをあとにする。『哲学評論』は所詮三号雑誌のひとつでしかなかつたのだらうか。

しかし、人間も時代も動いてゐた。ラインの対岸では、「革命の子」が終身統領の道を歩いたと歩んでゐた、あらゆる禍ごとのその源を、つまり形而上学者(イデオログ)を池に抛りこみ、王冠を溝から拾ひあげるために、である。——此岸では、三号雑誌のさしもの洪水も退き始めた、非哲学からの攻撃にむきになり相互の動静に餘りに

も過敏になつてゐた一城の主^{あち}たちは、それぞれ思想的構築を再開する。新しい成果を世に問ふ人々の中には、学界の耆宿・中堅にまじつて、次第に新顔が現はれ始めた——フリース、クラウゼ、そしてヘルバルト⁽⁴¹⁾。その中には未だヘーゲルはゐない。二年、三年——なほも彼の名は現はれなかつた。

しかし、彼が体系の構築のため骨身を削りに削つてゐるのは確かであつた。イエーナ大学の講義要覽に自著の近刊とその使用とを公告していはば氣をもたせたことも再三にとどまらなかつた⁽⁴²⁾。しかも、彼の努力が結実しないである間に、業績において先んぜられたフリースに今度は教授職への昇進においても先行されさうになり、彼は自分の無業績に多少ひけめを感じながらも、宰相ゲーテに宛てて恭しく懇請してゐるのである——最年長の私講師たる愚生を描いて、他の私講師がこの榮職に任命されますならば、大学における愚生の活動力がいささか鈍りはしないか、そこを是非閣下に御賢察願ひたく存ずるのであります⁽⁴³⁾。——しかし切羽詰つてゐたのは、公的生活の面だけではなかつた。生計の不如意はイエーナ全期を通じて彼を苛み^{さいな}、後期になると彼は、生活の安定のために、イエーナを去つて他の地に講筵を設け直すことを、あるひは何らかのジャーナルを刊行することを、本気で考へるやうになつたほどである⁽⁴⁴⁾。——このやうに、公私の両面にわたる生活の息苦しき重苦しき、そして懃ふいとまもない緊張と心労との連続にも拘らず、彼の構築の事業はつひに停止することがなかつたのである。

四一二 一八〇七年の春、ドイツの読書人は、新刊書『学の体系。第一部。精神の現象学』(System der Wissenschaft. Erster Theil, die Phänomenologie des Geistes.) を手にする。それは彼らにとつて、ヘーゲルの最近の思想に於ける・ほとんど四年ぶりの機会であつた。しかし、『哲学評論』の曾ての読者で、特に『論評の本質』の内容を記憶にとどめてゐた者は、いまこの新著を、序文から緒論へと読み進むにつれて次第に不審の念に駆られ、遂に立ち上つてかの論評誌を取り出し、机上で両者の比較対照をば試みなかつたであらうか。——

——曰く、「およそ哲学を始めるには、知一般といふこの場所^{トポス}にまで「つまり、絶対の他、在の中にただ自己のみを

認識することができるやうな次元にまで」意識が来てゐることが必要である。……学^{サイエンティフィカント}は、意識のほうがこのエーテルにまで登つてくるべきだ、と主張するが、逆に、個人の方も、学は少くとも、学その立場に到達するための梯子を自分に差し出すべきだ、と要求する権利を持つてゐる。……この両者はそれぞれ、その他者には真理を逆さまにしたもの (das Verkehrte der Wahrheit) であるかのやうに見える。……学はそれ故に、このなまの自己意識がある場所を自分と統一しなければならぬ。」(Werke IX: S. 22~23)——しかし、哲学が開示する世界は、常識に対し即且対自的に顛倒してゐて当然であり、哲学は常識のために何かを調製したりすべきではない、とまで断言されてはゐなかつたか。(三一二、(4)を参照) 哲学は、常識中の非理念的要素に対しては、従つて、常識自体に対しては、断罪する法廷でしかありえなかつたではないか。——

——「しかし、個人をこの知一般にまで導くためには、われわれは一方では、そこまでの長い道程を耐へ忍ばなくてはならないし、他方では、契機^{契機}「精神の諸段階」のひとつひとつに足を止めねばならない、といふのは、各契機が絶対的(即且対自的)に観察されるのは、……各契機の規定の特有性(Eigenümlichkeit)の中に「精神の」全体が観察される限りにおいてだからである。」(Werke IX: S. 25)——だが、哲学する、とは、特有性のもとに滞留して豫行にあたり、時間を費すことではなく、仮のもの半端なものには目もくれず、捨身になつて真理に肉薄してゆくことではなかつたのか。(三一二、(2)および(3)を参照) どうして彼は、こんな悠長なことを言ふやうになつたのか。

更に——「学は……「漸く出現したばかりの時点においては」少数の個人の秘教的な持物であるかのやうに見えるが、……その形態が完全に展開し終へたときは、公教的(exoterisch)ともなり、万人に理解されるものとなる。」(Werke IX: S. 15)「われわれは信念を持つてゐなくてはならない、真理はその時期が来れば時代に滲透する本性を持つ、といふこと、……個人は、未だ自分ひとりのものでしかない真理が事実真理であることを確認するために、公衆を得るといふ実効^{エフェクト}を必要とすること、さういつたことについて、信念を持たねばならぬ。」(Werke IX: S. 49)

等々の論述にいたつては、かつての主張にまづ完全に撞着するものではないだらうか。哲学はその本性上、秘教的である、ポピュラーにならないといふことが真正な哲学の資格である。「カントの要請論が一般の賛同を得られたのは、それが自体的には劣悪な思想なればこそである」(vgl. Werke IV; S. 346) ⁽¹¹⁴⁾ などとまで断言し切つてゐたのは、いつたい何処の誰であつたか。

しかも、以上は夥しい類例のうちから、ごく僅かを取り出して対置対照したものに過ぎないが、決して、文字のうへを皮相に比較しただけではない。この対照から浮彫になつてくるのは、思想自体の変貌であつて、概念内容の単に偶然的な変化にはとどまらないのである。といふのは、上掲の諸所に共通の主題は、哲学といふものをいつたいどう考へるか、といふ・およそ哲学するものにとつて最重要且つ絶対不可避の問題であり、しかもこの問題が、本質的一点に絞られて、哲学と哲学外とは、つまり絶対知と反省知とは、それ自体としてどう関聯するのか、といふ形式において問はれてゐるからである。換言すれば、否定的なものの反省的なものは、果してそしてどこまで絶対の中へ媒介されうるかが問はれ且つ答へられてゐるからである。しかも今や「もし、反省を真理の中から取り除き、絶対者の積極的契機として捉へないならば、これは理性を誤認するものである」(Werke IX; S. 19~20) ⁽¹¹⁵⁾ と主張される。——しかし、それでは論評期のヘーゲルは理性を誤認してゐたのであらうか。当時の彼においても、反省は、たしかに既一方では、絶対者に対する思弁的な両義性において、即ち否定的関係と同時に積極的關係において、理解されてゐた。しかし、遙かに優勢であつたのは、反省をば、消極的原理として規定する方向であつた、つまり、同一性を対立にまで分割し分離し、しかもこの分裂をやつと形式的に統一する権能 ^{ちから}しか持たず、従つて、絶対を相対へ・無限を有限へ変容させるだけの、真の絶対者に関係すればその働きの消え失せるやうな、さういふ抽象的な力として、理解する方向であつた。(Werke IV; S. 19, u. S. 223) ⁽¹¹⁶⁾ まして、反省が、精神的生の立場において、近世の運命たる・有限性の實在主義 ^{リアリズム} の、その産出の原理と見做されたとき、それはただ専ら否定的な働きとして、つまり「理性を有限性の形式

にまで絶対的に制限し」「この有限性を神聖化しつつ」理性を忌避する運動として捉へられてゐるのである。(vgl. Werke IV; S. 322~323)——⁽¹⁴⁷⁾

それ故、反省といふ最も重要な概念に関して、彼ヘーゲルのその理解の重心が移動して来てゐることは明白である。否、そのみならず、この変化が、じつは彼の思想全体がこの間にいはば地氾りの変貌を遂げたことに基いての変化であり、従つて、この変貌の一環をなすものであることも亦、明瞭である。彼は、かつて論評期にいだいてゐた理念的聯関を、ないしは、哲学、絶対知、反省等々についての理解を否定した、あるひは寧ろ否定を経験した、さればこそ、かつての理念をここで最早そのまま繰返しはしなかつたのである。

四—三 さうだとすると、当然この変貌に連繫して、論評^{クリティーク}の概念にも重大な変化が現はれてゐなければならぬ。われわれは、その変容を、「縮論^{アインシュトック}」における「知の吟味 (Prüfung)」の概念のその分析によつて、手繰り出しつつ素描^{スケッチ}して見よう。つまり、さきに解明された論評の本質、即ち理念の法廷的聯関と、このたびの「吟味^{アブリューズンク}」、即ちみづから立てた尺度又は真によつて、意識が対象についての知を吟味する運動とを、重ね合せて見よう。

まづ「緒論」では、吟味とは、意識が、自分のほうで豫め真 (das Wahre) と言明しておいた尺度によつて、対象についての知がこの尺度に一致するかどうかを検査することである、と一応される。知が尺度に一致しないときは、もちろん意識は、尺度 (としての対象) に合致するやう、知を再構成しなくてはならない。しかし、知を変更しさへすればよく、尺度は決して動かしてはならないかのやうに見える。——ここまでは、『論評の本質』での論評も、これと同一の構造である。論評において尺度になるのは、永遠に自己同一的な理念であり、論評遂行の主体は対象をこの理念のもとに包摂するのであるから、尺度も主体もこの理念において相互に、また自己自身とも、一致し、従つて変化の外にある。ただ論評の対象のみが、その中の理念的要素は承認され非理念的要素は否定されるといふ仕方、外からの働きを蒙る (変化する) のである。

然るに、『精神の現象学』では、更にそれに加へて、吟味において変らねばならないのは知だけではなく、対象〔における自体存在〕も尺度も同様である、と言はれるのである。「ある尺度で測られるべきものがその吟味に合格しない場合には、吟味のこの尺度もまた変化する。それで、吟味といふのは、単に知を吟味することだけではなく、吟味の尺度を吟味することでもあるのである。」(Werke IX: S. 60)——尺度自体が変るべきだ、といふこの思想こそ、この『精神の現象学』ではじめて対自化して来た・真に新しいもの、真実の附加である。しかし、どうしてこのやうな附加が可能であるのか。理念そのものが尺度であるのなら、たとへ吟味が吟味自身にはね返つて来て、吟味する尺度自身を吟味することになつたとしても、理念の自己確認が成就されるだけで、尺度に変化は生じない筈である、理念は時間を超えてゐるからである。——

その通りであつて、まさにそれ故に、ここでは、尺度も吟味の主体も、単に自己同一的存在者^{ゾムゼン}として、それぞれただそれだけで(対自的絶対的に)観られてゐるのではない、それらはすべて、それらがそこにおいてのみある・尺度や吟味主体の諸形態の全系列のなかへ、つまり經驗的意識が弁証法的に運動してゐる場所の中へ、個別的存在者として移され、ワン・ノウ・ゼムとして見直されてゐるのである。換言すれば、經驗する意識の諸形態を遺漏なく悉く包むやうな場所が——さういふものとしての、精神的生の世界が——すでに現実に現出してゐるのであつて、その中で、いちいちの論評活動がその契機とともに相対化され客観化されてゐるのである。しかもこの場所たるや、全形態を肯定し包括し受容するのみでなく、その否定性からいへば、尺度の、従つて理念のその自己同一性をさへ空無化して移ろはしめるほどの威力である、この精神的生においては、理念の永遠な自己同一性をも凌ぐやうな無常性が、つまり理念の歴史性が対自化してくるのである。——だからこそ、この世界では、吾々が自分で動いて何か手出し(Zutat)をする必要は毛頭無い、意識が吟味を重ねて自分自身にまでそれを及ぼしてゆくのに委せ、吾々はただ仔細に成り行きを静観(Zusehen)しておればよいのである。あるひは、この精神的生の世界においては、意識がこれから、遍歴す

べきすべての宿駅が、すでに全形態の完全な系列として出揃つてゐるのであつて、この世界の方から見れば、意識のひとつひとつの活動（理念的尺度を以てする吟味）については、その吟味も評価も意味づけもみな完了してゐる、と言はねばならない。従つて、その都度の経験の中にかかり切つてゐるやうな意識が、それにも拘らず純化されて精神となり真なる知に到達するためには、この全体的世界が、意識そのものの外あるひは背後にゐて、意識に隠れながら、しかも意識の歩みを毎回支援してゐなくてはならない、即ち意識の偶然的經驗的な歩みが学的展開にまで高まるのは、「吾々」が意識に手を添へて（Zuhilf）ゐるからである。

——かうして、この世界には、意識（論評の主体）、意識の対象それ自体（尺度）に加へて、第三の契機たる吾々、つまり世界そのものが積極的に登場し、世界聯関を形成する、即ち世界が世界自身を規定してゐるのである。——もちろん、論評期における彼の論評概念の中にも、既に精神的生の立場が理念的実体の聯関に並行して現出してゐた。それはしかし、理念的論評の歩みをいはば目的論的に統制しつつ、反省世界の否定性を否定性として対自化するところまで、全き虚無の深淵に究極するところまで、^{ポテンツ}勢位を高めてゆきはしたが、最高の総体性の甦りについては、ましてその構造や働きに関しては、抽象的形式的に、従つて独断のないし豫言的に主張するにとどまつてゐた。——いま、この現実の中に、世界自身が理念（尺度）にすら隠蔽された契機として実は臨照してゐることが明確にされ、それによつてこの世界のすべての契機が現前したのであるから、論評の概念においてもいかに大きな変貌が生じてゐるかは、一目瞭然、疑議することは最早ないであらう。

四—四 それ故、論評活動期から『精神の現象学』までのあひだに生起した変化は、単に一、二の重要概念のその変容にとどまるものではない。彼の思惟を動かしてゐる理念的聯関の全体が、従つて契機の個々の内容はもとより相互の配列も重心の所在も、更には思惟自身のエネルギーも方向までも悉く、あるひは転換しあるひはそれに連動してゐるのである、つまり彼の世界そのものが変貌してゐるのであつて、それは決して、一旦完成した体系が教授法上の

實際的必要から編集し直されて生じたやうな変化ではない。

しかも、このメタモルフオーゼが、単なる変動ではなく、ある方向を（帰趨すべき行先としてであれ実現すべき目的としてであれ）明確に意識して、全体が転換した結果であることについても、もはや贅言を要しないであらう。

——ヘーゲルが自己の存在を賭けて論評活動に乗り出したとき、その思想的根拠となつた理念聯関は、じつはふたつの思惟聯関、即ち理念的実体の立場と精神的生の立場とのその混在であつた。両者はそれぞれになほ質的固有性を失はず、従つて相互には漸く形式的反省的の關係するだけで、内的な媒介的統一にまで齎らされてゐない。しかし、このやうな根拠からの論評がとにかくその最高の可能性に到達し、論評としての最後の一步をば現実に歩んだとき、ヘーゲルは事實上、精神的生の立場が理念的実体の立場を契機として自己内に止揚する方向で、前述の混在關係をすつきりさせたのであつた。とはいへ、それはなほ形式的にそのやうに定立されてゐるだけである。この定立の眞の含蓄は、『精神の現象学』においてはじめて周到に展開された。即ち、論評のこのやうな完成とともに理念の自己同一性が最早維持され得ず、吟味と断罪とが受容と静観とに転換さるべきことについては、一般的概念だけからも推定しえた所であるが、（三一六参照）それが、学、の、体、系、の、第、一、部、においては、尺度（理念）の可変性として、そして理念の永遠性よりも更に深遠な世界自体の「吾々」といふ仕方での・現前として、具体的に規定され確認されたのである、そしてそのやうにして、精神的生は自分が体系構築の唯一の基礎であることを提示したのである。——

かくして、現在の到達地点から回顧すると、論評から構築へ向ふ彼の思惟運動は、そのまま彼における精神的生の流動であつたことが看取される。即ち、彼の思惟は、はじめの渾沌未確定な状況（論評）の中から、纏て進路を決定するとともに溢出し、理念的実体の立場を自己内へ止揚しつつ精神的生そのものに向つて流路を開いてゆく（構築）が、それは又、彼の精神的生が、更に、いつそ普遍的な精神が、彼の中で流れを拓きつつあることでもある。このやうな流動はそれ故に確定した方向を持つ運動である、つまり実体から主体（又は精神）に向ふ運動なのである。従

つて、論評期から『精神の現象学』にかけて発生した・前述の根本的且つ全面的な変貌^{メタモルフォーゼ}は、その真実の相においては、実体を止揚して主体へ向ふこの運動なのであつた。彼の思惟が変容しなければならぬのは、彼の精神的生がまさにこの方向に向ふ運動であつたからであり、だからこそ彼の思惟はこの方向で構築を進めねばならぬのであつた。

しかし、いふまでもなく、この精神的生は、イエーナ期といふ比較的短い時期に限つて、そして論評といふ・ある特殊な外向的な文化活動としてののみ、現出した筈もないのである。従つてこの精神的生の運動そのものに更に多少とも迫りえんがためには、われわれは先づ、彼のフランクフルト・アム・マイン時代まで溯るとともに、またニュールンベルク時代にまで降つて、この運動の規模を概測しなければならぬであらう。その一方で、精神的生の展開といふこの見地から、イエーナ時代の諸文書を（論評活動関係の文書に限らず）あらためて再検討する必要があるであらう。その場合まづ、研究の今後の主題となすべき聯関は、イエーナ期の講義活動といふ文脈である。しかも、就中、実体関係を止揚して主体性へ向ふ・そのやうな運動として、精神的生そのものを本質規定することが果して妥当であるかどうか、といふ問題、即ち本論文におけるわれわれの論定のその基礎付けの問題に関しては、所謂『イエーナ時代の論理学および形而上学』関係の文書を最優先して取りあげねばならぬであらう。——これは勿論、この関係の講義手稿の中に、実体から主体へ向ふ運動が直接に論述されてゐる、といふやうな意味ではない、寧ろその反対なのである。その点について、精神的生の運動を理解するためにも、最後に、次のコメントを添へておきたい。——

四一五 たしかに、精神的生のかういふ方向は、形式的一般的には、すでにイエーナ時代の初期に、その概念的自覚にまで到達してゐた。反省といふ概念については曩に検討したが、絶対者を主体としても理解せよ、といふ・『精神の現象学』の根本綱領^{テーゼ}についても同様である。「制限されたものは、絶対的なものに関係するまさにそのことによつて、「否定されると」同時に、存立することが出来るのである。……理性は、「自由と必然といふ」対立者を、統

一することに於て同時に、否定する。……だが、この「否定的」統一の中で、対立する両者は、……それによつて絶対者に関係してゐるため、存立を得てゐるのである。」(Werke IV; S. 17~18)^(二九)「絶対者そのものは、それ故、同一と非同一定の同一である、対立することとひとつであることが同時に絶対者の中にある。」(Werke IV; S. 62)^(三〇)等々は、既に『差異性』において言明されてゐる思想である。

しかし、それではヘーゲルは、何故に、この概念的把握を基礎にして、体系構築の道をただ直押しに薦進しなかつたのであらうか。何故に彼は、非哲学假哲学への筆誅ごときに、構築の手を休めてまで没頭したのか、それは哲学のいはば外陣で瑣事にかまけてゐることではないだらうか。——たしかに、真理の体系への彼の肉薄は、論評活動によつて暫時、勢をあるひは殺がれあるひは矯められたかのやうに見える。しかし、有限性を神聖化し・それによつて理性を悟性にまで引きおろしてゐるやうな反省哲学を、ヘーゲルは放置することが出来なかつた、「有限を食ひ尽くせぬ(nicht aufzehren)やうな無限は真理ではない」(Werke IV; S. 324)^(三一)が、しかもさういふ非真理を主張する立場は、積極的な反哲学になるからである。それ故、彼は例へば、「有限や時間が永遠の中で消失することを嫌悪し恐怖して、有限なもの救済に狂奔する」ヤコービを徹底的に戯画化する。彼らにおける有限性の实在主義とは、要するに、哲学は不完全なものを完全に、といふ類ひの繰りに過ぎぬ。——このやうに否定的に対立する他者をば断罪することは、従つてまことに彼の立場そのものに属する所であり、精神的生自体がなさしめる所なのである。しかし断罪するその限りに於いて、精神的生は、相対又は有限に否定的に、対立するところの、「対立する」絶対又は無限となるであらう、つまりそれは、「哲学のただひとつの實在的客観的理念は、対立が絶対的に止揚されてゐる、といふことである。……絶対的同一性においてあるやうな哲学は、対立するものどちらか一方を、他から抽象し・ただそれだけで有るものとして(für sich selbst)承認するやうなことはしない、その最高の理念は対立の双方に無差別(indifferent)で、双方は個別的に観ればいづれも無であるから、さういふ意味で、かかる哲学は観念論である」

(Werke IV; S. 325) ^(III)とは言つても、さういふ理念聯関を、そのまま尺度となして他者を吟味する法廷的体系となるであらう。——して見ると、かの理念的実体の立場は、およそ戦ふ限りの精神的生にとつて、決して、外から偶々紛れ込んで来て異物のやうに混在してゐるのではない、自分の内に生まれた契機であり、自分と同質同根なのである。従つて、論評は又、彼にとつて本来的な、適意の活動でもなければならぬ。

しかし、このやうに精神的生が反省の立場に対して——そして、絶対は相対に、無限は有限に対して——否定的に對立する限り、兩者の統一は、この双方の彼岸、つまり外なる反省においてよりほかに、實現さるべき場所を持たなくなるであらう。なるほど、そこでの精神的生は最早精神的生ではなく、寧ろ反省された生に過ぎなくなつてはゐる。そこでの絶対は、反省されて概念化され形式化された絶対、相対的絶対であつて、いま先程掲げられたやうな絶対的絶対の理念にみづから背反するにいたつてゐる。しかもヘーゲル自身、精神的生のこのやうな反省化を、精神聯関の活動における単なる一契機一段階とのみは、つまり、精神の再生のための序幕とのみは見えてゐない、寧ろ、彼自身がこの反省化の中にのめりこみ、かくして反省的に思惟し、実は相対的絶対^(III)に過ぎぬものを絶対的絶対として定立してゐた。だからこそ、屢々、絶対は、有限を媒介し存立せしめるよりは却つて否定し消滅させる無差別として、兩極の無差別的中点として、実体的に思惟されてゐるし (Werke IV; S. 74 u. S. 325) ^(III)。また、実体—屬性關係が眞の思弁的關係と見做されて、因果關係といふ假象^(III)に対し優先せしめられてゐた。(Werke IV; S. 33) ^(III)

してみると、論評期のヘーゲルは、把握された・精神の理念聯関を、それに適つた形式で働かせてはゐなかつた、ともいへる。精神の理念を反省の仕方^(III)で理解してゐたことが、實際の論評において、ふたつの思惟聯関が混在したまま相互に未だ諧調をなさずにゐたその根拠でもあらう。従つて、論評主体のさういふ反省的自^(III)我性こそ吟味されねばならない。論評するもの自身が論評されるものと同一反省の立場なのであり、それ故、吟味の同じ尺度でみづから最後に徹底的に断罪されねばならぬであらう。つまり反省の世界の最後の非性として、剔抉され廃棄されねばならぬ

ものこそ、実は反省的世界の論評に反省的にのめりこんでゐた自分、自身とその尺度となのである。——この最終的否定によつてはじめて精神は、反省の中から蘇生する、即ち、精神として、現出する。つまり、このやうに深入りし、自己を失ひ、われとわが身を傷つけつつ自己自身によつて斃されるやうな展開こそ精神的生の本質である。敵を見出し、これと戦ひ、これを超えて和やはらぎに到るのはただ精神のみであり、それが精神の個性である。精神は、密室に己れを閉ぢこめてひとり構築に耽溺するやうな私的なものではない。それは、いつも既に己れを開いて外に出、また外に出でゐる運動である、弁証法ディアルクティックのエネルギーそのものである。理念的聯関ですらこれに内在してゐるのであつて、その逆ではない。まして論理的聯関のごとく最簡捷の道を選ぶやう強制されてはゐない、それは自由を生き、自由に進路を切拓いてゆく。それは、たしかにある吟味尺度の行詰りによつて暫時そして屢々激おどろむかに見えるけれども、かへつて愈々力を溜めてふたたび溢出し、その歩みを決してとどめはしないであらう、自分の本性によつて定められた目標、即ち精神としての精神に到るまで。

われわれはこの論文において、イエーナのヘーゲルを何よりも先づ、生きた全体的統一ユニタの像において理解しようと努めた。論評活動とその意味如何といふ問題も、この視点から、成らうことなら彼自身の息吹きを感じ鼓動が聞えるやうな場所から、髣髴とさせようと試みた。そのために、この全体のなかから、心的聯関および社会的時代の聯関をそれぞれ独立の实在聯関として解きほぐし、それらをその独自性と制限性において提示したが、それによつてはじめて、彼の活動の思想的根柢をなす理念的聯関のその対自化が可能になつた。——しかるに、この対自化の結果、判明したのは、この理念的聯関は実は、相互になほ質を異にするふたつの思惟聯関（理念的実体の立場および精神的生の立場）のその混在である、といふことである。ヘーゲルはいはば青さのままに論評に身を投じ、しかも経験を通じて事実上精神的生の立場へ踏みきる。しかし、実体を止揚して主体へ向ふこの精神的生の、その理念的聯関自体は、は

じめそれに相応しからざる反省的形式でしか把握され得なかつた——ヘーゲルは能否を超越して現実に戦はねばならなかつたからである。かくして、この生が即且対自的に概念把握されるまでには、なほ数年間の沈黙と沈潜とが必要であつたが、そこに開始された構築は、すでにその序論において、表現も思想的本質も一新されてゐた、その冒頭、反省的実体的形式の払拭が宣言されてゐる通りに、である。

しかし、このやうな迂餘曲折こそこの精神的生の個性なのである。——この流れに自分を委ねつつその水勢の緩急をつぶさに追体験することこそ、この精神的生を己が生として生きた人格とともに生きる (Ko-existenz) の可能性であり、たとへいかに多くの歳月をそのあひだに隔てようとも、そのひとの声咳のせめて一端を現実に思ひおこす希望でもある。そこに歴史そのものにおける超越が、時間の無常と卑俗な日常性からの自由が、成り立つであらう。——蓋し、時間が齎し時流が齎した褪色と忘却とのなから、そして独断や打算や卑屈がうづ高く築きあげた偏見の層の底から、誰が真相の発掘を冀はずにゐられよう。たとへば、非運に遭ひ非命に倒れた烈士の高き志操を何びとが弁ぜずにおられよう、たとへ百歳千載のちであらうとも、何びとが起つてその冤を雪がずにおられようか。同様に、時を経、数多の解釈を経て、いまなほ、然も愈々真意のしかとは定めがたき問ひかけもあらう。それが誤解と偏見の厚き雲に蔽はれてゐるならば、尚更のことである。——いづれにしても、その精神的生の個性を理解するためには、時間的なへだたりと卑俗な日常性とを、そして「科学的」理解をさへ、超出しなければならぬ。——しかし、この超越は、最早、ただ醒めて観るだけの、無為に到る超越ではなく、生きた邂逅を得るための超越である。(丁)

注記

一 テキストについて——最初のヘーゲル全集は、「故人の友の会 (Verein von Freunden des Verewigten)」の手により、一八三二年から四五五年にかけて、一八巻二冊にまとめられて刊行された。爾後、現在までに、ドイツを中心に、中絶した試みをも

合めて合計九種の全集が刊行されてゐる。以下、編者および大よその刊行年を記すと ② Karl Hegel; 1887 ③ G. J. P. J. Bolland; 1899~1908 ④ Otto Weiss; 1909 ⑤ G. Lasson; 1905~1932 ⑥ H. Glockner; 1931 ⑦ J. Hoffmeister; 1930~1955 ⑧ Gesammelte Werke; hrsg. im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft. 1968~ ⑨ E. Moldenhauer u. K. M. Michel; 1970——のちのち列挙せらるゝ。⑩は Suhrkamp 社の刊行する所び、現在最も便利とられており、⑪は未長く学術的權威たることを期して刊行された、いはばアカデミー版である。これは昭和五十六年八月末現在、四、六、七、八、九、十一、および十二の七巻が刊行されてゐる。

本論文は原則として、引用箇所を⑩によつて本文中に示し、それに対応する⑪以下のいつれかを注記の三におきて、略記して対照させる。その略記法は、⑫ Glock. ⑬ Lass. ⑭ Hoff. ⑮ Werke. ⑯ M. u. M. である。従つてたとくば、ノカザミ一版第四巻の三二五頁は、本文中では、(Werke IV; S. 325) とし、注記の引用箇所対照では、M. u. M., Bd. 2; S. 301 とし、それぞれ表記される。

二 (一) ヘーゲル哲学のやうな体系については、それが与へる所の「ぎつとりとした・堅牢で充実した手応へからうして」「形成」でも「生成」でもなく、構築といふ語が最も相応しいやうに思はれる。筆者には、それは、カナダラルの建設にも似た堅牢感を与へる——そこには、数十万個数百万個の、単純な直六面体たる煉瓦や切石を、垂直方向については錘、水平方向については水準器、といふごく簡単な道具によつて規整しながら、嘗て数十年数百年をつひやしてひたすら積みあげてゆく建設を通じてあるやうに思はれる。

(2) 一——の論述の基礎としたのが、次の三冊の大體である。(1) Hegel seigenhändiger Lebenslauf: M. u. M., Bd. 2, S. 582. ② Brief von Hegel an Schelling vom 2. Nov. 1800. (Briefe von und an Hegel, Bd. I, S. 58) ③ Brief von Hegel an Goethe vom 29. Sept. 1804. (Briefe von und an Hegel, Bd. I, S. 84) ——なほ、爾後、この『ケーヤン往復書簡集』は、Briefe へ監記する。

(3) ④ Heinz Kimmerle: Zur Chronologie von Hegels Jenaer Schriften, S. 133~145. (Hegel-Studien, Bd. 4, 1967)

⑤ derselbe: Liste der Jenaer Schriften Hegels. (Das Problem der Abgeschlossenheit des Denkens, S. 313~323, 1970)

(4) „Differenz des Fichte'schen und Schelling'schen Systems der Philosophie“ (1801) ——この『差異性』は、その

内面的動機からすれば、次の課題を果さうとするものである。即ち、何故に、シェリングは、フィヒテのいふ主観的な主観—客観に対して、客観的な主観—客観を対立させ、次いでこのふたつの主観—客観をいつそう高次のものへ高めねばならなかったのか、その根拠を示さうと意図するものである。しかし、その一方では思想界での或る情勢が外から彼に執筆を促してゐた。つまりラインホルトがバルディリに接近しながら、他方で、フィヒテとシェリングとを同じ思弁的立場の哲学者と断じ、みづからは、哲学を論理学（認識の形式的論究）に還元する方向で、哲学革命を遂行しようとしてゐる情勢であつた。(二—三) (2)を参照) つまり、このたぐひの非哲学に思想界でイニシアティヴを握らせてはならない、といふのが、ヘーゲルのもうひとつの執筆動機であつた。

- (5) シュレーラー女史は、イエーナ期以前の文書に対してヘルマン・ノールが開発した年代決定法を、再吟味しつつ更に整備して成果を挙げた。(Gisela Schüler: Zur Chronologie von Hegels Jugendchriften; 1963 (Hegel-Studien, Bd. 2)) しかし、この決定法を——それは「書体変遷の意味理解」(Buchstabenformendutung)と呼称されてゐる——そのままイエーナ時代の文書にも適用するには、次の諸点をも慎重に勘案すべきである。(1) フランクフルト時代終末までの草稿については、その殆んどが印刷されておらず手稿にとどまつてゐるため、ノール・シュレーラーの方法で一貫して解釈出来よう。しかしイエーナ時代の文書の過半は印刷されて手稿そのものとしては存しないため、年代順に配列するとき、刊行の時期を以て作品成立の時期と見做さざるをえぬものが多い。つまり年代決定のために二重基準を用ひざるをえない。(2) 『イエーナ時代の文書年表』は、年表である以上、数百ページにおよぶ大著も、わづか一、二ページの断簡も、すべて同等に順次配列して番号をつけてゆかねばならない。(3) 同様、それは、不特定多数の読者のための公刊物も、公刊を意図せぬ私蔵文書も、ましてその存在について間接的証言しか存しない文書についても、すべて同列に扱はねばならぬのである。——
- (6) アカデミー版第四巻の編者ハルトムート・ブフナー博士の推定では、『哲学評論』の創刊号が発売されたのは、一八〇二年正月早々のことである。そこから更に逆算して、この号のための論文は一八〇一年の十一月はじめには完成してゐたであらうとも推定出来るのである。(Hartmut Buchner: Hegel und das Kritische Journal der Philosophie, S. 123~4 (Hegel-Studien, Bd. 3, 1965)) 同博士のこの論文は、今後、Aを以て指示する。なほ、註記二の(26)をも参照のこと。

(7) 但し、『哲学評論』の終刊後、ヘーゲルは一八〇六年五月十七日までの間に、ザラートの著書に書評を試みたことがある

やうに見えぬ。(Werke IV; S. 518. Briefe, Bd. I; S. 108~9, S. 112~4, u. S. 459~60.) しかし、この書評が公刊された形跡はなく、手稿も現存しないが、『精神の現象学』の執筆との関係において興味ある事実である。

(8) 事実、ヘーゲル自身において、論評、とりわけ書評といふ領域への関心は終生継続してゐる。ハイデルバルクおよび特にムルリンで、彼は幾度か力のこもつた書評を試みた。

(9) ヘーゲル自身、ゲーテに宛てた前掲の書簡(一八〇四年九月二十九日付)の中で、「私のいままでの学術的(literarisch)著作は微々たるもの(geringfügig)でありまして、あつて閣下の御高覧に供しようべきほどのものはないと思はせんと述べてゐる。教授昇任を求めたこの書翰における「微々たる」の一語は、単に恭敬謙遜のための措辞であらうか。

(10) この問題に対する方法論的反省を、それだけで展開するならば、解釈学的循環の問題に到達することは勿論である。

(11) Hartmut Buchner: A. S. 100.

(12) 以下、筆頭編輯人、雑誌名、刊行期間の順に列挙する。(1) Friedrich von Schiller: „Thalia“ (1785~91) (2) derselbe: „Neue Thalia“ (1792~93) (3) derselbe: „Horen“ (1795~97). 執筆者の中には、ゲーテ、ヘンダー、W. フンボルト、A. シンレーマン等々の名が見えぬ。(4) F. I. Niehammer u. J. G. Fichte: „Philosophisches Journal“ (1795~98) (5) Chr. G. Schütz u. G. H. Hufeland: „Allgemeine Literatur-Zeitung in Jena“ (1785~1804) 但し、一七九九年に、シレーゲル兄弟およびシッピングはこの新聞と袂を分つてゐるが、それによつて、この新聞の性格も次第に変質し、浪漫主義に敵対してゆへやうになつた。(Werke IV; S. 189) (6) Die Gebrüder Schlegel: „Athenäum“ (1798~1800) (7) C. L. Reinhold: „Beiträge zur leichteren Übersicht des Zustandes der Philosophie beim Anfange des 19. Jahrhunderts“ (1801~1803) (8) J. G. Meusel u. G. E. A. Mehnert: „Erlanger Literatur-Zeitung“ (1799~1802) (9) Fr. W. J. Schelling: „Zeitschrift für spekulative Physik“ (1800~1801)

(13) ヘルダーリンは、たとへば、一八〇一年六月二日付けで一通の書簡をシラーに宛ててしたため、シラーの推挽を切に請うた。彼も亦、ヘーゲルとまさに同じ頃、イェーナ大学で講ずる希望を抱いてゐたのである。「……私はまた、このことによつて、誰にも迷惑をかけたことはありません。もし思ひとどまるやうにこの意見でしたら、沈着に他の道をたどりませぬ……私はもとより、もつとあはせてゐない価値を自分の人生に与へようなどと思ひ上つた試みをする者では決してないのですから。」これらの言葉を、シッピングは、そしてゲーテにあつて、援助を乞うた。ヘーゲルの前掲の二通の書簡(注記の

- (2)の(2)③と比するがよい。また、シラーがすでに一七九九年十二月にワイマールへ転居してゐたことをヘルダーリンが何も知らなかつた事実を思ひ合せるがよい。何びともこの詩人の辿つた悲運に対し、暗然とせざるをえないであらう。(『ヘルダーリン全集』第四卷、四六二—三ページ。志波一富訳。河出書房新社。)
- (14) Gotlob Ernst Schulze (1761~1833). Jakob Salat (1766~1851).
- (15) ラインの対岸では、すでに一七九九年十一月十日(ブリュッセル十九日)、ナポレオンがクーデターによつて権力を掌握し、同年十二月の新憲法によつて第一統領に就任してゐた。
- (16) 二—三(1)から(6)までの記述は、Hartmut Buchner: A. u. derselbe: Editorischer Bericht (Hegel, Werke IV; S. 523~557) 1968. を参照。なほ、後者は今後、 α を以て指示する。
- (17) F. W. J. Schelling: System des transzendentalen Idealismus. (1800) Vorrede. (Schellings Werke: Bd. 2. hrsg. von M. Schröter)——序言の最後には、「 α — β — γ — δ — ϵ — ζ — η — θ — ι — κ — λ — μ — ν — ξ — \omicron — π — ρ — σ — τ — υ — ϕ — χ — ψ — ω 」と記されてゐる。
- (18) 従つて、『差異性』論文がはじめてシケリングに、自分は本来ノイヒテとは立場を異にしてゐるのだ、と気付かせたといふ見解は、上記の事実と抵触するのではある。(Hartmut Buchner: A, S. 106.)
- (19) Hartmut Buchner: B. (Hegel, Werke IV; S. 525~529.)
- (20) Brief von Hegel an Mehmel vom 26. Aug. 1801. (Briefe, Bd. I; S. 63~64.)
- (21) Karl Rosenkranz: G. W. F. Hegels Leben (1844). S. 162.
- (22) Hartmut Buchner: A, S. 126~127.
- (23) (1) フォナー博士は、その忍耐強い努力によつて、『哲学評論』の各号の発行時期を推定された。(2) アカデミー版全集の上段欄外の内側には、この論評誌原本の頁付が記載されてゐる。——(1)、(2)を総合すると、この論評誌の次のやうな外観が浮び上るであらう。

第一巻・第一号……一八〇二年正月はじめ……III~XXIV+1~130

・第二号……一八〇二年三月二十日以前……1~126

・第三号……一八〇二年初冬又は年末……1~98

第二巻・第一号……一八〇二年七月下旬……178 (第2頁欠)

・第二号……一八〇二年初冬又は年末……178 (第2頁欠)

・第三号……一八〇三年五月中旬……176

(3) 筆者はこのやうな比較対照のうへに、更に、執筆者問題に対する同博士の見解を採用して、シェリングに属する部分とヘーゲルに属する部分とを、それぞれに通算してみた。その場合、どちらかといへばヘーゲルに帰せられてゐる次の論文や記事のその頁数を、シェリングにも加算してみた。即ち、(1) 第一巻第一号、『緒論。哲学的論評の本質』の二三頁。(2) 同じ号の『雑報欄の意図』(Besonderer Zweck des Blatts)の七頁。(3) 第一巻第二号の『雑報欄』(Notizenblatt)の一四頁。(4) 第一巻第三号の『雑報欄』における「ゲッティンゲン情勢」の四頁。これらの合計四七頁の執筆にシェリングも等分に参加したと仮定すると、『哲学評論』通算六冊七一三頁のうち、シェリングは二八一・五頁を、ヘーゲルは四三一・五頁を寄稿したことになる。

(24) „Über das absolute Identitäts-System und sein Verhältnis zu dem neuesten (Reinholdischen) Dualismus“ (Bd. I, Stück I: S. 1~90). Ein Brief von Zettel an Suenz“ (Bd. I, Stück I: S. 122~130). 176 (23) とを比較せよ。

(25) シェリングは、一八〇一年まで、彼が主宰する『思弁的自然学雑誌』をはじめ著述の大半を、イエーナの出版社ガープホルト (Gaber) から刊行してゐたが、この一八〇二年、印税の支払ひ等の問題で、この出版社と不和になり、問題は裁判沙汰にまで発展した。シェリングは、やむなく『思弁的自然学雑誌』を廃刊にし、一八〇二年以後は『思弁的自然学新誌』と題して、テュービンゲンのコマタ社から刊行する。Brief von Hegel an Schelling vom 27. Febr. 1804. (Briefe, Bd. I: S. 79 u. S. 452)

(26) F. W. J. Schelling: Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums. (1803) Vorwort. (Schellings Werke: Bd. 3. S. 231.)

(27) F. W. J. Schelling: Aus den Jahrbüchern der Medizin als Wissenschaft. (1806). Vorrede (Schellings Werke: Bd. 4. S. 66.)

(28) vgl. Heinz Kimmerle: (∞) — (1); S. 125 ff.

(29) „Über die wissenschaftlichen Behandlungsarten des Naturrechts, seine Stelle in der praktischen Philosophie

und sein Verhältnis zu den positiven Rechtswissenschaften“ (1802~1803)

- (30) 『エッセー』の序文の論文の原題は「……Einleitung. Über das Wesen der philosophischen Kritik überhaupt……」(Werke IV; S. 117~128) 『宗教の批判』……, Wie der gemeine Menschenverstand die Philosophie nehme,……“ (Werke IV; S. 174~187) 『宗教の批判』……, Verhältnis des Skeptizismus zur Philosophie……“ (Werke IV; S. 197~238) 『信の批判』……, Glauben und Wissen, oder die Reflexionsphilosophie der Subjektivität……“ (Werke IV; S. 315~414)

(31) この概念は、ルビンは「真理の歴史性を却けて、無時間的に永遠な超絶的真理を主張する立場」としてその「一般の意味で用いた。神学的意味は、ルビンは特に読まじきわけである。

(32) ヌーレンホッフ (Karl Leonhard Reinhold) は、一七九四年にキール大学に招かれるまで、ニュルンベルグで約七年間、講じた。ニュルンベルグのあとを継いだのは、コトリンである。

(33) Werke IV; S. 327 ff (M. u. M., Bd. 2; S. 304 ff) u. S. 329~330 (M. u. M., Bd. 2; S. 308~309). 特に「カンと神の決裂」(1797) Werke IV; S. 340~341 (M. u. M., Bd. 2; S. 324~326) を参照。ルビンの箇所は、ルビンが特に念頭にならざるを得ない——Kant: K. d. r. V., B 19, B 75 f, B 129~B 140 u. Kritik der Urteilskraft, § 76~78 に見られる。

(34) クーゼンが論評の対象として主題的に名指した十二名は——K. L. Reinhold, Chr. G. Bardili, F. Bouterwek, J. Chr. F. Wernenburg, K. F. W. Gerstäcker, W. T. Krug, G. E. Schulze, J. Salat 及び Kant, Fichte, F. H. Jacobi, F. Schlegelmacher である。但し、シュライエルトマン(1797)は、常にその著『宗教論 (Reden über die Religion, 1799)』の名のみが挙げられている。なほ、散逸したと看做される書評は、ホルダーやフィッシャー(1799) (G. Chr. F. Fischer) の著に関するものがあつた。ついで一八〇一年ないし二二年の作成と見られる。

(35) 反省世界の根源そのものを一挙に衝く問題は、三一五以下で検討する。

(36) 組織神学が、イエスの十字架上の死と復活と最後の審判との統一的理解を、根本課題として問うてゐることは勿論である。この論文は、このふたつの観念を、否定性概念としての異同は如何、といふ一点に限つて比較することである。

(37) C. H. Weisse の問い合せに対するシュリンク自身の回答であつて、その日付は一八三八年十月三十一日になつてゐる。

(Hartmut Buchner: A, S. 134~135.)

- (38) ショーラー女史の分析では、編輯者によつて『キリスト教の精神とその運命』と名付けられたこの草稿の、第二節から第五節にかけての部分は、初稿が一七九八年から九九年におよぶ秋冬の候に、最終稿が一七九九年中ないし一八〇〇年にかけて成立したものと推定される。罪、裁き、刑、宥し、といった主題は、この部分の前半で印象的にとりあげられてゐる。H. Nohi: Hegels theologische Jugendschriften (1907), besonders: S. 276~285. vgl. Gisela Schiller: a. a. O., S. 133.
- (39) Brief von Hegel an Schelling vom 2. Nov. 1800. (Briefe, Bd. I; S. 60) *„Ich frage mich jetzt, …… , welche Rückkehr zum Eingreifen in das Leben der Menschen zu finden ist.“*
- (40) Friedrich Immanuel Niehammer (1766~1848)
- (41) Jakob Friedrich Fries (1773~1843), Karl Christian Friedrich Krause (1781~1832), Johann Friedrich Herbart (1776~1841). *„Vier Jahre 1803 in der ‚Reinhold, Fichte und Schelling‘ (1803)“*
- (42) „System der Philosophie als evidenter Wissenschaft“ (1804) (4) „Wissen, Glaube und Abndung“ (1805) (5) 講義 *„Grundlage des Naturrechts“* (1803) (6) „Grundriß der historischen Logik“ (1803) (7) „Entwurf des Systems der Philosophie“ (1804) を公刊した。また一八〇六年に *„Hauptpunkte der Metaphysik“* の第一巻を公刊した。vgl. Nicolai Hartmann: Die Philosophie des deutschen Idealismus (1923~29). 3. Auflage, S. 233. *Zeittafel der Hauptwerke des deutschen Idealismus.*
- (43) *„Über die Zeit der Hauptwerke des deutschen Idealismus.“*
- (44) *„Über die Zeit der Hauptwerke des deutschen Idealismus.“*
- (45) *„Über die Zeit der Hauptwerke des deutschen Idealismus.“*
- (46) *„Über die Zeit der Hauptwerke des deutschen Idealismus.“*

- 三 引典箇所按察——(一) M. u. M., Bd. 2; S. 176~177, u. S. 209. (1) M. u. M., Bd. 2; S. 208 u. S. 273~279. (II) M. u. M., Bd. 2; S. 141. (III) M. u. M., Bd. 2; S. 211~212. (IV) M. u. M., Bd. 2; S. 434~530. (V) M. u. M., Bd. 2; S. 171~187. (VI) M. u. M., Bd. 2; S. 188~207. (VII) M. u. M., Bd. 2; S. 213~272. (VIII) M. u. M., Bd. 2; S. 287~433. (IX) M. u. M., Bd. 2; S. 143 (1) M. u. M., Bd. 2; S. 20 ff. (11) M. u. M., Bd. 2; S. 294. (13) M. u. M., Bd. 2; S. 169~170. (14) M. u. M., Bd. 2; S. 432. (15) M. u. M., Bd. 2; S. 432~433. (16) Hoff, Bd. 5 (Phänomenologie des Geistes); S. 29~30. (17) M. u. M., Bd. 2; S. 33~34. (18) M. u. M., Bd. 2; S. 21 (19) M. u. M., Bd. 2; S. 181. (20) Hoff, Bd. 5; S. 24~25. (21) Hoff, Bd. 5; S. 27. (22) Hoff, Bd. 5; S. 16~17. (23) Hoff, Bd. 5; S. 58. (24) M. u. M., Bd. 2; S. 332. (25) Hoff, Bd. 5; S. 21. (26) M. u. M., Bd. 2; S. 30 u. S. 250. (27) M. u. M., Bd. 2; S. 298~300. (28) Hoff, Bd. 5; S. 72~73. (29) M. u. M., Bd. 2; S. 26~27. (30) M. u. M.; Bd. 2; S. 96. (31) M. u. M., Bd. 2; S. 300. (32) M. u. M., Bd. 2; S. 302. (33) M. u. M., Bd. 2; S. 111 u. S. 302. (34) M. u. M., Bd. 2; S. 49. (35) M. u. M., Bd. 2; S. 210

〔附記 本稿は昭和五十五年度の関西哲学学会学術大会(同年十月二十五日)における個人研究発表の内容を約五倍に増補した。』

(筆者 ちかじ・たけむら 京都大学文学部〔西洋近世哲学史〕教授)

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

Von der Kritik bis zum Aufbau des Systems —Eine Untersuchung über die Jenaer Zeit Hegels

von Osamu Sakai
Professor des Instituts für Geschichte
der Neueren Philosophie an der Philoso-
phischen Fakultät an der Universität Kyoto

Mit diesem Aufsatz bezweckt der Verfasser, die kritischen Tätigkeiten Hegels in Jena darzustellen, und zwar aufgrund 1. des psychischen Zusammenhangs, 2. des kulturell-sozialen und 3. ideell-philosophischen und schließlich 4. seine damalige Idee der Kritik mit derselben der „Phänomenologie des Geistes“ zu vergleichen und seine eigentliche Denkrichtung in dieser Periode als Bewegung von „Substanz“ zu „Subjekt“, oder als dieselbe von „Idee“ zum „Leben des Geistes“ aufzuzeigen.

1. Als Hegel 1801 nach Jena kam, hat er im Innersten seines Herzen zwei starke Tendenzen des Wollens erfahren: die eine richtet sich zentripetal auf das Innere, den Aufbau des eigenen Systems. Er hat sich also mit der „Verwandlung des Ideals des Jünglingsalters in ein System“ beschäftigt. Die andere erweitert sich zentrifugal nach dem

Äußeren und will ein eigenes Dasein in der Welt der Intelligenz einnehmen. Die letztere hat dann als das, was als seine kritischen Arbeiten bekannt ist, Ausdruck und Gestalt angenommen. (Vom Ende 1801 bis zum Mai 1803).

2. Hegel veröffentlicht nun das „Kritische Journal“ gemeinsam mit dem Initiator Schelling unter der gemeinsamen Idee der Kritik und zwar zwecks des „Kampfs gegen Unphilosophie“. Er hat aber in der Tat über 60% der gesamten Seiten des Journals (2 Bände: 6 Hefte: alle Seiten zusammen 713 Seiten) geschrieben und war noch polemischer, aggressiver und konsequenter als der Initiator. Wie erklärt sich dieser Unterschied des Verhaltens zwischen den beiden? Für Schelling war die Kritik gegen „Unphilosophie“ eine zufällige, auf ihn von außen her zukommende Sache, während er schon mitten in seinem genialen Schaffen, im Aufbauen des eigenen Systems stand. Für Hegel bedeutete sie eine Notwendigkeit, um wieder „in das Leben des Menschen einzugreifen“ und sich ein festes Dasein zu erhalten, da es zu diesem Zeitpunkt noch gar keine Veröffentlichung von ihm gab, und er sich gerade erst habilitiert hatte. Hierin verstand Hegel sich selbst seine Selbständigkeit gegenüber seinem Partner angesichts derselben Arbeit.

3. Welche Idee liegt aber dieser seiner Tätigkeit zugrunde? Zwei verschiedene Denkwissenschaften haben sie vermischt motiviert: der eine ist der Standpunkt der Idee-Substanz, von dem aus man die Gegenstände mit der Idee als Maßstab prüft, bewertet und nur das Ideelle davon aufnimmt. Dem anderen, dem Standpunkt des—wie Hegel sagt—„Leben des Geistes“ gelten die Negativitäten auch in der Notwendigkeit ihrer Erscheinung, obwohl sie doch kritisch geprüft und als Formen der Reflexionswelt negiert werden müßten. Diese beiden Standpunkte stimmen miteinander nicht überein, aber Hegel

hat trotzdem seine Kritik durch die Vermischung der beiden fortgesetzt und wollte daher die Geistesformen der Neuzeit als zur Reflexionswelt zugehörig zusammenfassen. Im Augenblick, wo man solche Kritik vervollständigen würde, würden alle Formen ins Nichts versinken, woraus sie aber als Momente der höchsten Idee auferstehen müßten. Indem Hegel den Augenblick als den spekulativen Karfreitag bezeichnet hat, hat er aber schon den Standpunkt der Idee-Substanz in den des geistigen Lebens tatsächlich aufgehoben und in dieser Richtung die oben erwähnte Vermischung geordnet.

4. Wir könnten gewiß den Strom seiner solchen Denkbewegung nachvollziehen, wenn wir die Einleitung der „Phänomenologie“ mit der des „Kritischen Journals“ vergleichen: denn wir finden dabei, daß das wirklich Neue in die erstere eingetreten ist, d. h., das „Wir“, das nur Zusehende, das sogar den ideellen Maßstab verwandelt. Dieses „Wir“ wäre nichts anderes als das vormalige „Leben des Geistes“, der jetzt als solcher erscheint. In der Periode der Kritik hat Hegel zwar schon den echten Begriff des „Absoluten“ als „Subjekt“ oder „Geist“ erreicht, aber er hat ihn nur formal, also als im Gegensatz zum Endlich-Relativen auffassen müssen, da er zunächst sich in den Kampf gegen die Unphilosophie „à corps perdu“ hineinstürzen mußte. Er mußte insofern zunächst noch das Absolute als Geist nur als Substanz oder als Idee, die als Maßstab der Prüfung dient, verstehen. Auf seinem Wege von der Kritik zum Aufbau des eigenen Systems hat „das Leben des Geistes“ in ihm selber solche Verworrenheit überwunden, dessen Strom wir als Denkbewegung von Substanz zu Subjekt charakterisieren dürfen.